日本遺産認定地域における取組事例集
（平成27･28年度認定地域）

令和５年３月　株式会社リクルート

この事例集について

目的

- 総括評価・継続審査が完了した平成27年度・28年度認定地域の取組内容のうち、令和3年12月に公表された「令和3年度の総括評価・継続審査を踏まえた地域活性化計画等の改善について」を踏まえ、日本遺産各地域の取組の進化・改善に向け、参考となると考えられる取組を抜粋して紹介するものです。
- 事例集の作成においては、株式会社リクルートが実施した「現地調査」「プロデューサー派遣」「課題調査アンケート」等を踏まえ、各地域の取組において部分的に参考となる取組内容を抜粋・抽出し、再度各地域へのヒアリングを実施し取りまとめを行いました。

活用方法

- 地域活性化計画の取組の柱である、１．組織整備、２．戦略立案、３．人材育成、４．整備、５．観光事業化、６．普及啓発、７．情報編集・発信により取りまとめておりますので、自地域の課題に応じてご覧いただき、参考にしてください。
- キーテーマは、各項目の冒頭に取組推進のポイントとともにまとめて記載しています。
- 事例について更に知りたい場合は、下段の問い合わせ先より地域に問い合わせを行い、自地域の取組の進化・改善に活かすとともに、地域間の交流を図っていただけると幸いです。

目次

1. 組織整備(6事例) P.5

◎福井県（小浜市、若狭町）
海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 －御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－ P.6

◎滋賀県（大津市・彦根市・近江八幡市・高島市・東近江市・米原市・長浜市・草津市・守山市・野洲市）
琵琶湖とその水辺景観 －祈りと暮らしの水遺産 P.8

◎広島県呉市、神奈川県横須賀市、長崎県佐世保市、京都府舞鶴市
鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴 ～日本近代化の躍動を体感できるまち～ P.10

◎愛媛県（今治市）、広島県（尾道市）
“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島－よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶－ P.12

◎小松市
『珠玉と歩む物語』小松 ～時の流れの中で磨き上げた石の文化～ P.14

◎山形県（鶴岡市、西川町、庄内町）
自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』～樹齢300年を超える杉並木につつまれた2,446段の石段から始まる出羽三山～ P.16

2. 戦略立案(2事例) P.18

◎福井県（小浜市、若狭町）
海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 －御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－ P.19

◎岐阜県 高山市
飛騨匠の技・こころ ―木とともに、今に引き継ぐ１３００年― P.21

3. 人材育成(3事例) P.23

◎淡路市・洲本市・南あわじ市
『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」 ～古代国家を支えた海人の営み～ P.25

◎奈良県（明日香村・橿原市・高取町）
日本国創成のとき ～飛鳥を翔（かけ）た女性たち～ P.26

◎福井県（小浜市、若狭町）
海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 －御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－ P.28

目次

4. 整備(4事例) P.30

◎佐賀県（唐津市・伊万里市・武雄市・嬉野市・有田町）、長崎県（佐世保市・平戸市・波佐見町）
日本磁器のふるさと　肥前　～百花繚乱のやきもの散歩～ P.31

◎小松市
『珠玉と歩む物語』小松 ～時の流れの中で磨き上げた石の文化～ P.33

◎愛媛県（今治市）、広島県（尾道市）
“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島－よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶－ P.35

◎安来市、雲南市、奥出雲町
出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～ P.37

5. 観光事業化(6事例) P.39

◎佐賀県（唐津市・伊万里市・武雄市・嬉野市・有田町）、長崎県（佐世保市・平戸市・波佐見町）
日本磁器のふるさと　肥前　～百花繚乱のやきもの散歩～ P.40

◎淡路市・洲本市・南あわじ市
『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」 ～古代国家を支えた海人の営み～ P.42

◎和歌山県（新宮市・那智勝浦町・太地町・串本町）
鯨とともに生きる P.44

◎富山県（高岡市）
加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡 －人、技、心－ P.46

◎宮城県（仙台市、塩竈市、多賀城市、松島町）
政宗が育んだ“伊達”な文化 P.48

◎大山町、伯耆町、江府町、米子市
地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市 P.50

目次

6.	**普及啓発(3事例)**	P.52
	◎長崎県（対馬市・壱岐市・五島市・新上五島町） 国境の島　壱岐・対馬・五島　～古代からの架け橋～	P.53
	◎郡山市・猪苗代町 未来を拓いた「一本の水路」－大久保利通“最期の夢”と開拓者の軌跡　郡山・猪苗代－	P.55
	◎福井県（小浜市、若狭町） 海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群　－御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－	P.57
7.	**情報編集・発信(2事例)**	P.59
	◎淡路市・洲本市・南あわじ市 『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」　～古代国家を支えた海人の営み～	P.60
	◎長崎県（対馬市・壱岐市・五島市・新上五島町） 国境の島　壱岐・対馬・五島　～古代からの架け橋～	P.62

(1)組織整備

取組推進のポイント

- 短期的には地域内外の人々がストーリーを体験できる事業を、**事業実施主体**が継続的に実施する仕組みを構築し、自立・自走を目指す。(①事業収益による財源確保、②自治体や事業者からの支援による財源確保)
- 中長期的には地域内外の人々がストーリーを体験できる事業を、**民間事業者**が継続的に生み出す仕組みの構築を目指す。
- 協議会等には、DMO等の観光関係者や、民間事業者が中心的な役割の担い手として参画することが望ましい。

キーテーマ	構成市町村	ストーリー
1 シリアル型地域における一体的な取組の推進	◎福井県（小浜市、若狭町）	海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 －御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－
	◎滋賀県（大津市・彦根市・近江八幡市・高島市・東近江市・米原市・長浜市・草津市・守山市・野洲市）	琵琶湖とその水辺景観　－祈りと暮らしの水遺産
	◎広島県呉市、神奈川県横須賀市、長崎県佐世保市、京都府舞鶴市	鎮守府　横須賀・呉・佐世保・舞鶴 ～日本近代化の躍動を体感できるまち～
2 協議会の自立・自走に向けた財源確保	◎愛媛県（今治市）、広島県（尾道市）	“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島 －よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶－
	◎小松市	『珠玉と歩む物語』小松 ～時の流れの中で磨き上げた石の文化～
3 DMO等の民間事業者の巻き込みによる事業推進	◎山形県（鶴岡市、西川町、庄内町）	自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』 ～樹齢300年を超える杉並木につつまれた2,446段の石段から始まる出羽三山～

＃005・平成27年度認定

海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群
－御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－

申請者：**福井県（小浜市、若狭町）**

ストーリー概要

若狭は、古代から「御食国」として塩や海産物など豊富な食材を都に運び、都の食文化を支えてきた地である。また、大陸からつながる海の道と都へとつながる陸の道が結節する最大の拠点となった地であり、古代から続く往来の歴史の中で、街道沿いには港、城下町、宿場町が栄え、また往来によりもたらされた祭礼、芸能、仏教文化が街道沿いから農漁村にまで広く伝播し、独自の発展を遂げた。近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群沿いには、往時の賑わいを伝える町並みとともに、豊かな自然や、受け継がれてきた食や祭礼など様々な文化が今も息づいている。

将来像（ビジョン）

近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群が、単に鯖を運んだだけでなく、若狭から京都へ、京都から若狭へ様々な文化をもたらした交流の道であることが注目されている。特に、和食が大成した京都の食文化を形成してきた「御食国」の歴史は今も続いており、食文化と祈りの場である社寺、祈りの民俗行事、食材を育む自然を一体的に発信活用することにより、京都を中心とした京阪神地区の食の都、そして京都に訪れる多くの観光客が食の根幹を求めて訪れるストーリーや基盤を整え、交流人口の拡大と地域全体の活性化を図っていく。いにしえには、「京は遠ても十八里」と呼ばれた文化交流をもとに、北陸新幹線全線開業を目論み「京は遠ても十八分」というスタンスを打ち出し、京都郊外観光地として京都との一体化を図っていく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■旧古河屋別邸・庭園／建造物（県指定）

江戸時代の回船問屋「古河屋」全盛の時代、文化12年（1815）に建築された建物並びに庭園。

■放生祭／無形民俗文化財

毎年9月第３土日に旧小浜地区24区のうち12区が伝統の神事芸能を八幡神社に演舞奉納する祭。

■熊川宿／国重伝建

若狭街道ルートの物流の中継拠点。軍事上、物流上の要衝として重要な役割を担った宿場町。

（1）組織整備：事例1

シリアル型地域における一体的な取組の推進

事例サマリー

- 2自治体共同で歴史文化基本構想を策定した経験を活かし、その後も共同事業実施や定期的な情報共有などにより、日本遺産に対する共通認識を形成している。
- 各種取組を牽引してきた地域DMOをモデルとしながら、新たに地域の民間事業者が中心的な役割を担う形でプロジェクトリーダーとなるエリア開発法人を組成した。

組織整備における取組内容

＜概要＞

- 着地型観光及び滞在型観光の推進、保存と活用を戦略的に行うプロジェクトリーダーである小浜市の「地域DMO」と若狭町の「エリア開発法人」が戦略的に事業を実施し、「小浜市の歴史と文化を守り市民の会」及び「若狭町伝統文化保存協会」等多様な地域プレーヤーが下支えとなり、地域連携を進めている。

＜着地型観光及び滞在型観光の推進＞

- プロジェクトリーダである地域DMO（小浜市）やエリア開発法人（若狭町）が地域プレイヤー等との連携により着地型観光の商品化を進めつつ、滞在時間延長や周遊促進等につながる歴史泊（滞在型観光）の推進に取り組んでいる。

＜熊川宿組織整備及び文化財保存活用支援団体指定＞

- 構成文化財「熊川宿」を活用するプロジェクトリーダーを担うUIJターンの若手起業家等による会社設立に加え、小浜市では文化財保存活用支援団体を指定し、多様な主体による取組の土台を構築している。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 日本遺産活用推進協議会が市町をまたぐ広域的な事業展開にイニシアティブをとりながらも、小浜市では登録DMOのおばま観光局がプロジェクトリーダーとして、若狭町では地域の主要団体と住民・若手起業家との融合による事業体制が整いつつあり、地域内で文化遺産を保存・活用する好循環が回り始めていた。

＜経緯＞

- 小浜市では、地域DMOが各種資源等を商品化しながら、構成文化財である小浜西組地区を中心に「暮らすように泊まる」をコンセプトに7棟の古民家宿泊施設を整備し、着地型観光商品と連動させながら運用している。また、民間企業や地域と連携して宿泊観光を推進するオーベルジュ整備のプロデュース等にも取り組んでいる。
- 若狭町では、構成文化財である熊川宿において、既存の住民まちづくり団体とUIJターンの若手民間事業者が、新規店舗開店や宿泊施設の整備と既存のまちづくり活動を融合させながら進めており、持続可能な体制を組織してくために、地域法人を設立する動きとなった。

取組における工夫点

＜ Point①：行政区の違いを超えた共同事業実施や共有認識の形成＞

- 一般的には行政区の違いにより、連携がとりにくいシリアル型ではあるが、小浜市・若狭町は平成23年度に共同で歴史文化基本構想を策定し、策定以後も共同での普及啓発事業を実施しており、日本遺産に対する共有認識や同調の意識が高い。
- 協議会の議論や議決事項をもとに、小浜市では地域DMOがプロジェクトリーダーとして、行政の支援も得ながら事業を推進し、若狭町においても、熊川地区民間事業者4社と若狭町の出資による熊川エリア開発法人を設立した。
- ともに文化財の保存・活用の重要性を十分理解しながら、日本遺産ストーリーを活かした観光振興や地域活性化を推進している。

＜ Point②：各地の取組を牽引するプロジェクトリーダーの擁立＞

- 小浜市では、日本遺産認定当初から、プロジェクトリーダーとなる地域DMOが着地型観光や滞在型観光の推進に積極的に取り組んできた。
- 若狭町では、若手民間事業者等が既存のまちづくり活動と相乗効果のある取組を展開しながら関係性を深めてきたことで、熊川エリア開発法人「クマツグ」を令和3年度に設立し、重伝建地区である宿場内の古民家活用やアドベンチャーツーリズム等を牽引する組織体制を整えた。

＜ Point③：各種事業の推進による関係者・関係団体の巻き込み＞

- 例えば、令和3年度に実施している「英語コンシェルジュ　スケールアップ事業」にて、地域DMOで中山道等でのガイド経験を持つ外国人人材を雇用し、各種多言語化に取り組みつつ、インバウンド向け有料ガイドツアー（サイクリングガイドツアー）販売を先行して進める中で、地域のサイクリング関係団体が協力団体に加わった。

問い合わせ先

■ 小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会 事務局（小浜市産業部文化観光課）
電話：0770-64-6034　メール：rekishi@city.obama.lg.jp

＃008・平成27年度認定

琵琶湖とその水辺景観　－祈りと暮らしの水遺産

申請者：**滋賀県（大津市・彦根市・近江八幡市・高島市・東近江市・米原市・長浜市・草津市・守山市・野洲市）**

ストーリー概要

穢れを除き、病を癒すものとして祀られてきた水。仏教の普及とともに東方にあっては、瑠璃色に輝く「水の浄土」の教主・薬師如来が広く信仰されてきた。琵琶湖では、「水の浄土」を臨んで多くの寺社が建立され、今日も多くの人々を惹きつけている。また、くらしには、山から水を引いた古式水道や湧き水を使いながら汚さないルールが伝わっている。湖辺の集落や湖中の島では、米と魚を活用した鮒ずしなどの独自の食文化やエリなどの漁法が育まれた。多くの生き物を育む水郷や水辺の景観は、芸術や庭園に取り上げられてきたが、近年では、水と人の営みが調和した文化的景観として、多くの現代人をひきつけている。ここには、日本人の高度な「水の文化」の歴史が集積されている。

将来像（ビジョン）

地域社会や寺社が支えてきた和のくらしと祈りを映す「水の文化」の価値に地域の人々自身が気づき、水を使った伝統的な生活や寺社の文化財を軸に地域ならではの素材を活かし、訪問者と対話し体験を共有する観光まちづくりを行う。これを継続して、地域住民の自主的な地域づくりの活動を促進し、「水の文化」の共通ストーリーで周遊を行う「水の文化ぐるっと博」を開催し、将来的にさらなる観光客との質の高い交流、地域産業への波及を促し、地域の持続的な活性化につながるツーリズムを目指す。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■比叡山延暦寺

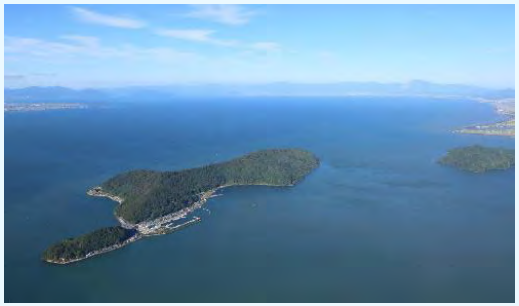
水の恵みあふれるこの世の楽園、理想郷と讃えて琵琶湖を、「天台薬師の池」に見立て、最澄が比叡山に建立した。
※根本中堂は現在改修工事中

■白鬚神社

琵琶湖に浮かぶ大鳥居が有名な、近江最古の神社。
”白鬚”という社名が示すとおり延命長寿の神様が祀られており、参拝客も多い滋賀の絶景パワースポット。

■沖島

琵琶湖最大の島。淡水湖中の島で今も漁業で生業をしているのは、日本でここだけで、伝統的な湖国の食文化が今も引き継がれている。



（1）組織整備：事例2

シリアル型地域における一体的な取組の推進

事例サマリー

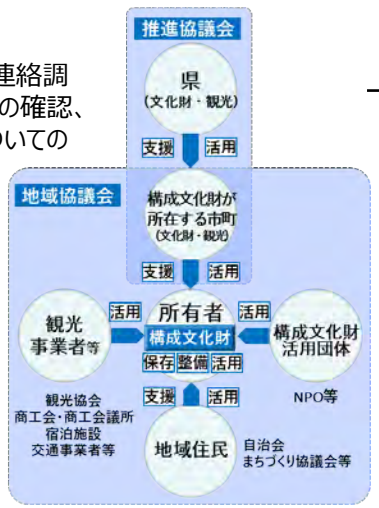
- 日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会の事務局である公益社団法人びわこビジターズビューロー）が中心となり、事業計画の作成や事業の実施、日本遺産の魅力発信、各地域協議会との連携などを実施するとともに、構成市10地域と情報共有を図りながら事業を展開。
- 各地域における日本遺産を活用した事業推進のための組織として、地域協議会を設立。地域協議会及びその構成員が主体となって、地域に密着した事業を実施するという地域間連携の仕組みができあがっている。

組織整備における取組内容

＜概要＞

- 組織体制は、全体組織である日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会と、地域組織である地域協議会からなる。
- 日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会の総会・連絡調整会議では、事業の進め方の検討、事業の進捗状況の確認、各市での取組状況及び事業実施に伴う調整課題についての検討、事業の調整・意見交換等が行われ、地域間の情報共有を図りながら事業を展開している。
- 地域協議会は、各地域における日本遺産を活用した事業を推進することを目的とし、市（観光・文化財部局）、観光協会、構成文化財の所有者、ボランティアガイド協会、観光関連事業者などで構成される。地域協議会及び地域協議会構成団体は、地域に密着した、日本遺産を活用した事業を展開している。

＜組織図＞



取組の背景・経緯

＜背景＞

- シリアル型で足並みを揃えて事業を実施していく上で、推進協議会及び作業部会の組織設立・運営は必要不可欠であり、連絡会議の回数を指標としている。

＜経緯＞

H27.7　日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会 設立
　　以降、総会を年1回程度開催
H27.10　担当者会議（連絡調整会議）開催。以降、年1～3程度開催
H27.9～H28.12　大津市、彦根市、近江八幡市、高島市、東近江市、米原市、長浜市に地域協議会が設立。（10地域のうち7地域に地域協議会が設立）地域協議会には、令和2年度までに合計58団体が参画している。
H29.10～H30.3　「日本遺産　滋賀・びわ湖　水の文化ぐるっと博」開催

取組における工夫点

＜Point①：事務局のリーダーシップによる、円滑な地域間調整＞

- 協議会事務局の公益社団法人びわこビジターズビューロー（地域連携DMO）が全ての統括を行う。協議会運営費、日本遺産事業費は県からの補助金となっており、県（文化財部局、観光部局）と地域の窓口の役割も担う。
- 各地域の事業については地域協議会からの提案により、協議会からの補助金（10万円）を出している。地域からの提案制のため、地域間の温度差があるのが課題。

＜Point②：自治体担当者同士の連携の工夫＞

- 構成自治体の担当者は数年で異動になることが多く、新任担当者は日本遺産への関心が薄くなってしまう可能性がある。令和4年度は特に入れ替えが多い年となったため、通常の総会、連絡会議の他に顔合わせのミーティングを行った。
- 日本遺産の研修と担当者間の連携を深めるために、敦賀、甲賀など近隣の日本遺産地域への見学会を行った。

＜Point③：各地域で活躍するガイドとの連携＞

- 現在ボランティアガイドは、構成自治体毎に所属しており、地域を超えたガイド活動は難しい。また観光客も周遊に至らないことが多かった。
- 「御水印帳」を作成し、構成地域の日本遺産ガイドツアーに参加した人に配布。各地域のガイドに同じ「日本遺産」事業として意識して活動してもらうこと、観光客に別地域の構成文化財を周遊してもらうことを狙う。

御水印帳

問い合わせ先

■ 日本遺産「水の文化」ツーリズム推進協議会（公益社団法人 びわこビジターズビューロー内）
■ 〒520-0806 滋賀県大津市打出浜2番1号「コラボしが21」6階　電話：077-511-1530　FAX：077-526-4393　E-mail：nihonisan@biwako-visitors.jp

＃035・ 平成28年度認定

鎮守府　横須賀・呉・佐世保・舞鶴
～日本近代化の躍動を体感できるまち～

申請者：◎**広島県呉市、神奈川県横須賀市、長崎県佐世保市、京都府舞鶴市**

ストーリー概要

明治期の日本は、近代国家として西欧列強に渡り合うための海防力を備えることが急務であった。このため、艦艇の配備を進めるとともに、国家プロジェクトにより天然の良港4つ選び軍港を築いた。静かな農漁村に人と先端技術を集積し、海軍諸機関とともに水道、鉄道などのインフラが急速に整備され、日本の近代化を推し進めた4つの軍港都市が誕生した。100年を超えた今もなお現役で稼働する施設も多く、軍港を中心として発展した4市特有の景観が近代化遺産としてその歴史を伝える。日本の近代化に向けて躍動した往時の姿を残す旧軍港4市は、どこか懐かしくも逞しく、今も訪れる人々を惹きつけてやまない。

将来像（ビジョン）

日本遺産「鎮守府」を活用した様々な取組を4市と各市の多様な主体が連携しながら磨き上げ、充実を図り、また、各市における長期総合計画や文化財保存活用地域計画等に基づく取組とも効果的に融合させ、4市が広域エリアで日本遺産事業に取り組む強みを最大限に発揮しながら施策を展開していくことにより、4市の有する魅力・価値を再評価し、将来に向けて継承・発信し、広域周遊の実現、鎮守府のブランド化を図り、それぞれのまちの更なる活性化と持続可能な地域づくりにつなげていく。
また、遠く離れた4市における日本遺産事業を自立的・継続的な取組としていくことにより、過去から現在に引き継がれた4市のつながりを将来に向けてより一層強固なものとし、広域的な都市間連携の新たなモデルとしていくとともに、将来に向けて国を守る重要な地域である4市から「鎮守府ストーリー」を通じて「4市の歴史的役割」や「4市の存在意義」、「平和の理念」のメッセージを未来に向けて力強く発信し、次世代へ受け継いでいく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■東京湾要塞（猿島砲台跡）

東京湾に浮かぶ唯一の自然島「猿島」に造られた砲台跡。れんが造りの貴重な歴史遺産で、弾薬庫・兵舎などの遺構が残る。

■呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）

日本近代化そのものといえる呉の歴史を伝える博物館。近代日本の造船技術の進化と技術力の高さを物語る資料を展示。

■旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設

大正11年に建設された長波通信施設。高さ136mを誇る3本の巨大な電波塔は鉄筋コンクリート技術の到達点というべき建造物。

■舞鶴赤れんがパーク

明治～大正期に海軍によって建造された赤れんが造りの倉庫12棟が現存、うち5棟を博物館・観光交流施設として整備。

（1）組織整備：事例3

シリアル型地域における一体的な取組の推進

事例サマリー

- 広域分散（隣接していない）シリアル型であり、4市が連携し効率的な事業が展開できる組織体制の構築
- 各市担当者間において密に連携を取る体制を構築し、４市各々の事業を実施しながら課題を検証できる仕組みを確立

組織整備に係る取組内容

＜概要＞

- 横須賀市・呉市・佐世保市・舞鶴市の各首長をトップとして「旧軍港市日本遺産活用推進協議会」を組織運営しており、年に一度、４市首長が一堂に集まり「旧軍港市日本遺産活用推進協議会部会長会議」を実施。
- ４市の文化、観光担当の課長級８名で構成する組織として運営委員会を設置し、年に４回程度会議を実施。情報共有や意思確認及び４市の運営・連携体制プラットフォームの役割を担う。
- 各市の観光協会、商工会議所も協議会構成員として参加しており、各事業の実施段階において観光関連事業者、学校教育機関等と協力できる官民の連携を図るための土台を構築。
- また、上記体制を通じて、4市連携ポスターの作成、構成文化財に対する4市共通の案内板の設置、4市連携事業として日本遺産MONTH等のイベント実施、また構成文化財の学術的（技術的）価値を再評価・発信していく取組として、学者、教育者等で設立された学術研究会を支援し、「旧軍港四市　鎮守府日本遺産シンポジウム」の開催等、４市連携であるからこそ得られるスケールメリットを活用した取組を展開している。

取組の背景・経緯

＜背景・経緯＞

- 昭和29年から続く旧軍港市振興協議会を母体とし、日本遺産認定を契機に新たに立ち上げた「旧軍港市日本遺産活用推進協議会」を中心に４市が連携していく仕組みを構築。
- 毎年４市長が集まり課題・今後の方向性を協議する部会長会議を開催。また、定期的に担当者会議、運営委員会、副市長会を開催し、スムーズな意思決定と迅速な情報共有、課題解決に向けたアプローチができる体制を整備。

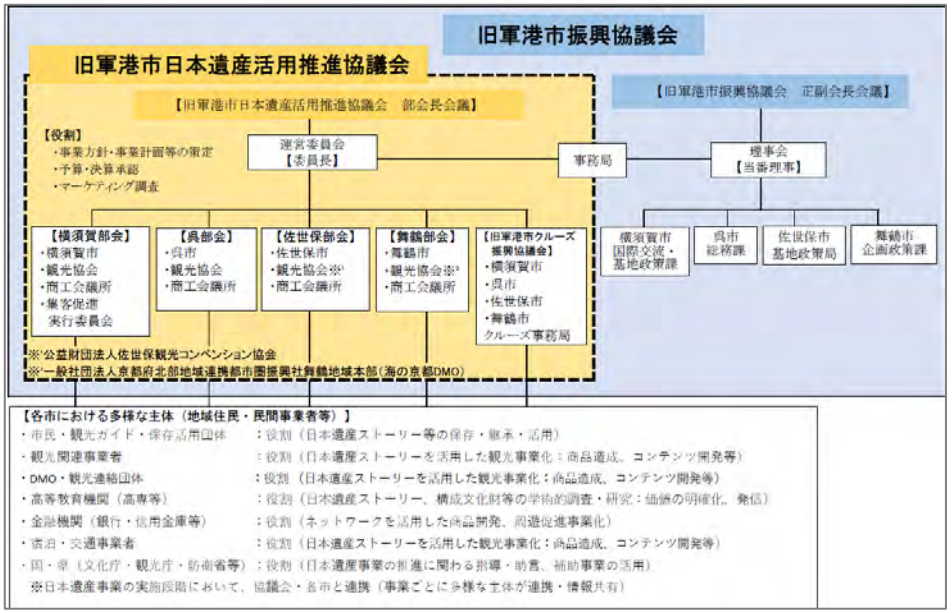
取組における工夫点

＜Point①：4市の連携を円滑にするための会議体設定＞

- 広域４市にまたがるシリアル型地域として、４市での認識統一と連携アクションを可能とする連携推進体制「運営会議」を構築した。

＜ Point②：派生テーマに関する4市連携による実務レベルでの会議体設定＞

- 事業内容に応じて、４市による実務での部会を別途設定。運営会議と連携しつつ、同派生テーマに関する具体的施策やアクションレベルでの計画立案や推進に向けた体制を４市共同で確立している。



問い合わせ先

■ 旧軍港市日本遺産活用推進協議会（旧軍港市振興協議会内）　03（5510）3260

＃036・平成２８年度

“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島
－よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶－

申請者：**愛媛県（今治市）、広島県（尾道市）**

ストーリー概要

戦国時代、宣教師ルイス・フロイスをして"日本最大の海賊"と言わしめた「村上海賊」"Murakami KAIZOKU"。
理不尽に船を襲い、金品を略奪する「海賊」（パイレーツ）とは対照的に、村上海賊は掟に従って航海の安全を保障し、瀬戸内海の交易・流通の秩序を支える海上活動を生業とした。その本拠地「芸予諸島」には、活動拠点として築いた「海城」群など、海賊たちの記憶が色濃く残っている。尾道・今治をつなぐ芸予諸島をゆけば、急流が渦巻くこの地の利を活かし、中世の瀬戸内海航路を支配した村上海賊の生きた姿を現代において体感できる。

将来像（ビジョン）

① 地域内外での発信：日本固有の海賊（KAIZOKU）文化をブランディング化し、世界に発信することでインバウンドによる外資の引き込みを狙う。地域内では、調査研究と普及啓発を図り、地域の子どもたちに地元の海賊文化に触れてもらうことで、シビックプライドの醸成をはかり、将来的に地域の文化遺産の伝承者になってもらうことを目指す。
② 民間事業者との関わり：村上海賊を活用し、観光、海事産業、農林水産など、地域のあらゆる産業との融合をすすめ、体験メニューや関連商品を開発し、地域の経済と交流の活性化をはかる。
③ 海賊を通じた他地域との交流：日本各地の海賊文化をもつ地域との交流および共同研究を進め、さらなる魅力を発掘することで、海賊文化を盛り上げ、新たな価値を世界に発信していく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■能島城跡

能島村上氏の代表的な拠点海城。島全体を城郭化した点が特色。最もストーリーを体感できる構成文化財。

■村上海賊ミュージアム

能島村上氏の史料を中心に、ストーリーに沿った常設展を構成する博物館。ビジターセンターの役割を果たす。

■因島水軍城

因島村上氏の歴史・文化をストーリーに沿って紹介する城郭型資料館。ビジターセンターの役割を果たす。

（1）組織整備：事例4

協議会の自立・自走に向けた財源確保

事例サマリー

- ふるさと納税を活用し協議会運営の財政強化を図り、日本遺産関連事業を進めている。
- 民間との協力による普及啓発を進めるにあたり、「村上海賊」の名称ロゴマークやシンボルデザインの使用規定を設けた。商品を販売する場合、寄付していただく仕組みを構築し、寄付金を協議会へ充当している。

組織整備における取組内容

＜概要＞

- ふるさと納税を協議会への負担金に充当し、日本遺産関連事業を進めている。
- 令和３年度は、今治市300万円、尾道市360万円を日本遺産関連事業として活用している。

村上海賊をテーマにした食の取組

日本遺産調査研究成果報告巡回展

- 協議会として、ピンバッチを販売。構成文化財である今治城のミュージアムショップ、因島水軍城等でも販売している。
- 日本遺産「村上海賊」の名称ロゴマークやシンボルデザインを使用して商品を売り上げた場合、売り上げの一部（5%）を自治体に寄付いただき、そこから負担金として協議会に充当している。

日本遺産
村上海賊

「村上海賊」名称ロゴ

「村上海賊」シンボルデザイン

ロゴマーク・シンボルマークを使用した販売商品

取組の背景・経緯

- 尾道市は平成29年、今治市は平成30年からふるさと納税を日本遺産事業で活用。
- ピンバッチの販売は平成28年から展開。
- 売上の５%の寄付の仕組みは令和３年度から展開。

取組における工夫点

＜Point①：ふるさと納税による日本遺産事業の展開＞

- ふるさと納税を活用し協議会運営の財政強化を図り、日本遺産関連事業を進めている。ふるさと納税を活用して実施する事業として以下の通り位置づけている。

今治市	村上海賊魅力発信事業
尾道市	日本遺産による地域活性化 ＊３つの日本遺産の協議会事業資金に充当

＜Point②：民間との協力による普及啓発と寄付の仕組みの構築＞

- ストーリー関連商品が販売されることで、地域の事業者の売上につながるとともに村上海賊の認知度が高まる効果がある。
- 日本遺産「村上海賊」の名称ロゴマーク、シンボルデザインは日本遺産「村上海賊」の魅力や価値を情報発信するツールと位置づけ、活用の規程を設けた。
- 名称ロゴやシンボルデザインを使用した商品を販売した場合、売上の一部を寄付する形をとっている。商品開発を行い民間に協力いただく代わりに、ブースの出店や商品をPRして販売促進に寄与している。令和３年度から取組をスタートしたが、寄付額は令和４年度は倍近くに増える予定。商品ラインナップも増えており、今後、更なる拡充を目指している。

問い合わせ先

■ 〒794-8511　愛媛県今治市別宮町1-4-1
■ 今治市総合政策部交流振興局文化振興課日本遺産推進係
■ TEL 0898-36-1608　FAX 0898-24-2008　Mail:bunka@imabari-city.jp

＃027・平成28年度認定

『珠玉と歩む物語』小松
～時の流れの中で磨き上げた石の文化～

申請者：**小松市**

ストーリー概要

小松の人々は、弥生時代の碧玉の玉つくりを始まりとして2300年にわたり、金や銅の鉱石、メノウ、オパール、水晶、碧玉の宝石群、良質の凝灰岩石材、九谷焼原石の陶石などの石の資源を見出し、時代のニーズに応じて、現代の技術をもってしても再現が困難な高度な加工技術を磨き上げ、ヤマト王権の諸王たちが権威の象徴として挙って求めるなど、人・モノ・技術が交流する豊かな石の文化を築き上げてきている。

将来像（ビジョン）

１．「次世代都市こまつ」へ

小松市の発展にキーとなる地域は、まさに日本遺産「石の文化」の構成資産がある里山地域と重なっており、これからの文化観光の資源として活かし磨き上げる。さらに、日本遺産「北前船寄港地安宅」とも連携し、「石の文化」と一体として取り組み、交流人口の拡大や里山への定住・関係人口の拡大を目指していく。併せて、小松市のアイデンティティとして根付く「歌舞伎のまち小松」とともに、「石の文化」とそこから派生する「ものづくり文化」について双璧を成すものとして、小松の代名詞となるよう取り組んでいく。

２．「石の文化」による持続可能な地域活性化

地域全体を「小松まるごとストーンミュージアム」と位置付け、「人づくり」をテーマに地域活性化に取り組んできた基盤を活かし、次世代に継承していくため「石の文化」を主目的とした「文化観光」を展開していく。日本遺産ストーリーが持つ「文化」・「交流」・「ものづくり」を体感することにより、交流人口、関係人口、定住人口の拡大につなげ、地域活性化を行う。また、九谷焼や石材産業など「ものづくり文化」も日本遺産ストーリーの柱であり、地元住民や観光産業に関わる人だけでなく、「ものづくり産業」の需要拡大につなげ、経済効果を生み出す好循環へシフトしていく。「文化観光」や「産業観光」、生業の発展による収益増だけでなく、関係人口の増加により税収額全体を維持させ、文化財の保存継承への再投資により、地域の文化や歴史が持続可能な「次世代都市こまつ」を目指していく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■八日市地方遺跡出土品

弥生時代の王たちを魅了した碧玉製管玉など、東西交流の結節点といえる出土品群（重要文化財）。

■滝ヶ原石切り場

文化11年より現在も採掘が行われる緑色凝灰岩の石切り丁場。新旧石切り場が見学できる。

■九谷焼製土場（九谷セラミック・ラボラトリーほか）

陶石から九谷焼陶土（坏土）を製作するまでの工程を行う工場。昔ながらの工程を見学できる。

組織整備：事例5

- 協議会の自立・自走に向けた財源確保
- 民間企業・団体の巻き込みによる事業推進

事例サマリー

- 協議会である地域DMOが、行政と連携して地域や関連団体に働きかけ、地元と協力しながら地域活性化に取り組んでいる。
- 認定を契機に活発化した活動と関連整備を結びつけることで拠点づくりを推進している。
- 企業版ふるさと納税の効果的な活用や、核となる事業（産業観光「GEMBAプロジェクト」等）を多角的に展開することで、自立・自走を目指している。

組織整備における取組内容

＜概要＞

- 地域おこし企業人（大手旅行会社出向、令和2年度～）が地元旅行会社との連携を担い、地元ガイドや構成文化財所有者・管理者と協力しながら着地型観光商品の開発を進めている。
- 九谷焼の窯元や工房から始まった産業観光「GEMBAプロジェクト」が市内のモノづくり企業全般に広がりを見せ、産業観光イベント「GEMBAモノヅクリエキスポ」等の取組を通じて、多様な分野の地域事業者の参画や担い手の育成につながっている。
- 九谷焼関連団体の有志が集まり、「こまつKUTANI未来のカタチ」実行委員会が組織され、イベントやワークショップを通して、全体を俯瞰できる新たなリーダーも現れ、小松の九谷焼ビジョンを作成した。
- 多くの地元関係者が連携して取り組み、整備された石の文化拠点地域で、地域のリーダーが中心となり、活用に向けて大学との連携等を進めている。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 日本遺産認定前の平成25年に物産振興協会と観光協会の2団体が統合される形で、（一社）こまつ観光物産ネットワークが設立された。
- 会員企業は地元の飲食・菓子・食品、酒蔵、宿泊、観光施設と多岐にわたり、設立時98だった会員数が、会員間の紹介を通じて令和3年には248に伸びている。

＜経緯＞

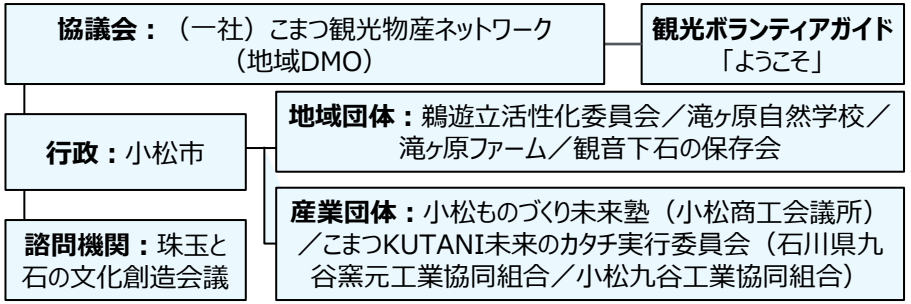
- 日本遺産認定後、複数の地域や団体で事業が始まり、組織づくりが行われる契機となった。
- 認定を契機に、石の文化拠点地域（滝ヶ原、西尾、鵜遊立、九谷焼）で地域活性化団体が活動を開始し、自ら発信する仕組み作りや受入態勢を整備した。加えて、ものづくり事業者と連携した「GEMBAプロジェクト」も始動した。
- 構成文化財である九谷焼やネットワーク会員企業の商品をふるさと納税の返礼品とすることで、石の文化のPRと業界全体の収入増にもつなげている。

取組における工夫点

＜ Point：拠点地域や関連団体との連携＞

- 地域DMOである（一社）こまつ観光物産ネットワークが協議会として、小松市と連携しながら、日本遺産に関連する各主体（民間企業、地域団体、産業団体、大学等）とともに、各種取組を進めている。
- 協議会と行政は一貫して連携関係にあり、ともに地域に入り地元と協力しながら受入環境整備や地域活性化に取り組んでいる。
- 構成文化財にかかわる業界団体でも、異分野との連携や地元との協業により事業を進めた結果、多くのプレイヤーが生まれる土壌ができつつある。

＜推進体制＞



問い合わせ先

■ 小松市交流推進部文化振興課　〒923-8650　石川県小松市小馬出町91番地　電話(0761)24-8130　FAX (0761)23-6404

＃020・平成28年度認定

自然と信仰が息づく『生まれかわりの旅』
～樹齢300年を超える杉並木につつまれた2,446段の石段から始まる出羽三山～

申請者：**山形県（鶴岡市、西川町、庄内町）**

ストーリー概要

山形県の中央に位置する出羽三山の雄大な自然を背景に生まれた羽黒修験道では、羽黒山は人々の現世利益を叶える現在の山、月山はその高く秀麗な姿から祖霊が鎮まる過去の山、湯殿山はお湯の湧き出る赤色の巨岩が新しい生命の誕生を表す未来の山と言われている。

三山を巡ることは、江戸時代に庶民の間で『生まれかわりの旅』として広がり、地域の人々に支えられながら、日本古来の山の自然と信仰の結び付きを今に伝えている。羽黒山の杉並木につつまれた石段から始まるこの旅は、訪れる者に自然の霊気と自然への畏怖を感じさせ、心身を潤し明日への新たな活力を与える。

将来像（ビジョン）

出羽三山の雄大な自然と日本を代表する精神文化を未来へつなぐ　～次世代が誇れる・憧れる持続可能な出羽三山地域を実現～

・精神文化の体験を通して新しい気づきや発見が生まれ、何度でも訪れたくなる地域（来訪者視点）
・自然を尊敬し感謝する心と、郷土への誇りと愛着が生まれる地域（地域住民視点）
・高い経済波及効果と地元への還元を生み出す地域（民間事業者視点）
・ひとりではなく、みんなで守り伝える地域（共通の視点）

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■羽黒山

現在の世を生きる人々を救う仏が祀られ、三山の中で里宮としての役割を持つ「現世」を表す山と言われる。羽黒山五重塔など多くの構成文化財を擁する。

■月山

「祖霊が鎮まる山」として「過去」を表す山と言われる。弥陀ヶ原湿原、東普陀落、佛生池など信仰にまつわる地名が残る。

■湯殿山

全てのものを産み出す山の神が祭神として祀られ、「未来」を表す山と言われる。

（1）組織整備：事例6

DMO等の民間事業者の巻き込みによる事業推進

事例サマリー

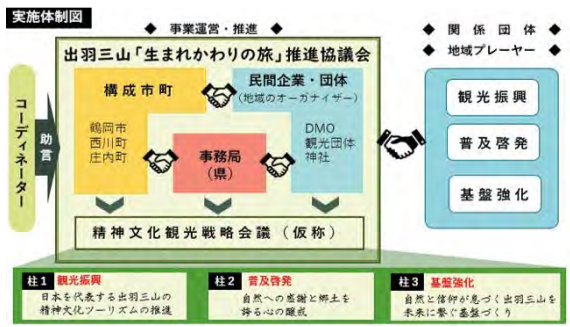
- DMO・観光団体・神社等からなる民間企業・団体と、構成市町、県の文化財・観光・教育・地域振興分野の複数の課からなる事務局で構成された推進協議会が主体となり日本遺産を推進。
- DMO等、多様な民間事業者がコンテンツ造成や調査等を手掛け、観光振興の要となっている。
- 令和3年以降は、副次効果として協力を得た民間事業者を主体にした伝統文化体験事業にも繋がった。

組織整備における取組内容

＜概要＞

- 出羽三山「生まれかわりの旅」推進協議会は、構成市町、民間企業・団体（DMO・観光団体・神社等）、事務局で構成され、構成員が夫々の強みを活かして取組を行っている。観光振興はDMOや観光協会等の民間団体が主体となっているが、その中でもストーリーを体験できるコンテンツ造成の企画やマーケティングはDMOが要を担い、データを基にした観光戦略立案への展開など、他の構成員への波及効果が期待される。
- 事務局となる山形県及び構成市町のメンバーは、観光担当課、文化財担当課、生涯学習担当課、地域振興担当課と多岐に渡る課から構成されており、それぞれのネットワークを活かすことで年20団体のペースで協力団体を増やし、認知拡大に繋がった。
- 累計57回の勉強会やワークショップを通じて、地域の大事な観光地である出羽三山に日本遺産を活用して更なる誘客へ繋げるという意識醸成がなされそれぞれが主体性を持ちながら、適宜、連携できる基盤ができている。また副次効果としてワークショップ等で発掘された民間事業者が主役となった普及啓発事業にも繋がっている。

＜組織図＞



取組の経緯

＜経緯＞

- H28.6　出羽三山「生まれかわりの旅」推進協議会設立
- H28　日本遺産シンポジウム、山形県博物館にて「日本遺産認定企画展」開催
- H29　年3回の住民向け講演会
- H30 ～　日本遺産出羽三山を活用した地域活性を図るための人材交流・育成ワークショップの開催（令和2年までに累計14回開催）
- R1　精神文化伝道師育成のためのワークショップ開催

※認定以降、上記以外にも、各構成市町や構成団体による歴史文化学習会、ガイド養成講座・地域プロデューサー育成研修会、ビジョン策定会などを定期開催

取組における工夫点

＜Point①：DMO発のストーリー体験プログラムや調査の実施＞

- 市町ごとにDMOと観光協会が観光振興の核を担っており、地域DMOであるDEGAM鶴岡ツーリズムビューローが鶴岡市を担当。DEGAM鶴岡ツーリズムビューローは経済団体、文化、交通、観光など幅広い分野の関係団体が参画しており、神社との連携も強い。令和３年度は、出羽三山神社による羽黒山の石段を歩き日本遺産ストーリーを体験できるプログラム「石段詣」に企画段階から協力。この「石段詣」では、「お注連（しめ）」という結び紐を掛けて参拝をするが、追加で、紐の色毎に財運など願いを込めた「縁紐」を1本200円でお頒けし、初穂料を石段の修繕に活かす取組も実施。その他、石段詣の参加者へ調査を実施し、それを戦略立案に活かすなど、魅力ある取組を進めている。

＜Point②：協力団体数の増加＞

- 初年度は、地元の応援獲得を目的に住民向けの現地研修会や企画展等を開催、2・３年目は地域プロデューサーやガイド育成、4年目以降は地域プレイヤー同士の人材交流に焦点を当てた勉強会開催等、累計57回の勉強会・ワークショップを通じて、各事業を一緒に推進したい団体から着実な協力を得て年20団体のペースで協力団体数を拡大。元々ストーリーの中心を担う出羽三山を観光に活用するという意識は強い中で「日本遺産」を活用して、より誘客に繋げるという意識醸成が強くなり、結果として盤石な連携体制を作り上げた。

＜Point③：民間事業者が主体となった伝統文化体験事業への波及＞

- 人材交流・育成事業で発掘された地域プレイヤーを起点に、出羽三山伝統文化体験事業として、企画段階から協業し、山伏体験など子供に向けた普及啓発にも波及した。

問い合わせ先

■ 出羽三山「生まれかわりの旅」推進協議会　（事務局　山形県観光文化スポーツ部博物館文化財活用課内）
TEL　023-630-2284　FAX　023-624-9908　E-mail　ybunkazai@pref.yamagata.jp

(2)戦略立案

取組推進のポイント

- 文化財保存活用地域計画、文化観光推進法に基づく認定計画等における日本遺産事業の意義・役割を明確化する。
- 将来像の実現に向けた短期的・中長期的な戦略の立案を行うため、ターゲットの設定、他の行政計画への位置づけ等を行う。

	キーテーマ	構成市町村	ストーリー
1	行政計画への日本遺産事業の位置づけ／PDCA サイクルを回す仕組みの構築	◎福井県（小浜市、若狭町）	海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 －御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－
		◎岐阜県　高山市	飛騨匠の技・こころ　―木とともに、今に引き継ぐ1300年―

＃005・平成27年度認定

海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群
－御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－

申請者：**福井県（小浜市、若狭町）**

ストーリー概要

若狭は、古代から「御食国」として塩や海産物など豊富な食材を都に運び、都の食文化を支えてきた地である。また、大陸からつながる海の道と都へとつながる陸の道が結節する最大の拠点となった地であり、古代から続く往来の歴史の中で、街道沿いには港、城下町、宿場町が栄え、また往来によりもたらされた祭礼、芸能、仏教文化が街道沿いから農漁村にまで広く伝播し、独自の発展を遂げた。近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群沿いには、往時の賑わいを伝える町並みとともに、豊かな自然や、受け継がれてきた食や祭礼など様々な文化が今も息づいている。

将来像（ビジョン）

近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群が、単に鯖を運んだだけでなく、若狭から京都へ、京都から若狭へ様々な文化をもたらした交流の道であることが注目されている。特に、和食が大成した京都の食文化を形成してきた「御食国」の歴史は今も続いており、食文化と祈りの場である社寺、祈りの民俗行事、食材を育む自然を一体的に発信活用することにより、京都を中心とした京阪神地区の食の都、そして京都に訪れる多くの観光客が食の根幹を求めて訪れるストーリーや基盤を整え、交流人口の拡大と地域全体の活性化を図っていく。いにしえには、「京は遠ても十八里」と呼ばれた文化交流をもとに、北陸新幹線全線開業を目論み「京は遠ても十八分」というスタンスを打ち出し、京都郊外観光地として京都との一体化を図っていく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■旧古河屋別邸・庭園／建造物（県指定）

江戸時代の回船問屋「古河屋」全盛の時代、文化12年（1815）に建築された建物並びに庭園。

■放生祭／無形民俗文化財

毎年9月第３土日に旧小浜地区24区のうち12区が伝統の神事芸能を八幡神社に演舞奉納する祭。

■熊川宿／国重伝建

若狭街道ルートの物流の中継拠点。軍事上、物流上の要衝として重要な役割を担った宿場町。

（2）戦略立案：事例1

行政計画への日本遺産事業の位置づけ／PDCAサイクルを回す仕組みの構築

事例サマリー

- 各文化財保存活用地域計画にて「御食国」をキーワードとして共有し、短期・中期・長期の事業を明確化した上で、日本遺産に対する共通認識を持って各種事業を推進している。
- 主要ターゲットと短期・中長期的な戦略を明確にし、地域DMOや各地域プレイヤーによる事業の情報収集・状況把握・事業協力や、効果的な誘客を促進するため認定地域に留まらない広域的な連携により、多様な主体との関係性構築に努めている。

戦略立案における取組内容

＜概要＞

- 平成23年度に共同で策定した歴史文化基本構想を発展させた文化財保存活用地域計画において「御食国」をキーワードとして共有して、小浜市では令和2年度、若狭町では令和3年度に国の認定を受け、日本遺産に対する共通認識を持って事業を進めている。
- 発信力のある京都の料理人等との連携のもと、「来て・学んで・食べて・繋ぐ」をコンセプトに、マーケティング・戦略構築・観光プログラム化・人材育成を総括して推進する「御食国アカデミー」を実施している。
- 小浜市では、令和3年度に観光まちづくりのマスタープランである「御食国若狭おばま観光まちづくり戦略」を作成し、御食国と鯖街道を最大の魅力と位置づけることで、日本遺産ストーリー及び地域コンセプト等を観光関連事業者はじめ、観光まちづくりに関わる関係者や住民に対する浸透共有を進めている。
- プロジェクトリーダーである地域DMOが、民間企業指導や地域法人立ち上げ、文化財管理者との連携等のプロデュースに加え、SAVOR JAPAN認定（農林水産省）を受けて進めている御食国の食文化を体感できるオーベルジュ整備等においても重要な役割を担っている。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 小浜市・若狭町は平成23年度に共同で歴史文化基本構想を策定しており、策定以後も共同での普及啓発事業を実施しており、日本遺産に対する認識の共有が図りやすい。

＜経緯＞

- 日本遺産認定後すぐに、認定に係るローカルマーケティング及びメインターゲットとなる京都市におけるマーケティングを実施。鯖街道の「鯖」に注目する中で、ブランド認知度の向上を進めてきた。
- 現在は、その認知度を引き継ぎ、御食国として「収益を生む食事」や「物語性のある食文化」に注目し、オーベルジュの展開も推進している。

取組における工夫点

＜ Point①：短期戦略と中長期戦略の明確化＞

- わかりやすいブランドである鯖街道の「鯖」から短期戦略によりブランド力の向上と情報発信を行い、訴求力のある「御食国」へと長期的にブランドをつなぐ戦略をとっている。

＜Point②：取り組む事業の明確化と実践の着実な蓄積＞

- 日本遺産の活用を含む文化財の保存・活用について、両市町で短期・中期・長期の事業を明確化し、同地域計画に基づき各種事業を順次実施している。
- 構成文化財での音楽会やマルシェの実施、日本遺産構成文化財活用事例の広報誌発行等によって、日本遺産に関する普及啓発に留まらず、地域プレイヤーの事業展開、サポーターとして文化財の理解を深める人材育成にもつながる事業が継続的に実施され、協議会も積極的に情報収集・状況把握・事業協力に努めている。

＜Point③：戦略的な広域的事業の連携＞

- 主要ターゲットである京都市からの誘客を促進するため、県域をまたいだ広域連携を促進している。
- 認定地域内に留まらず、日本遺産ストーリーの根幹となる鯖街道沿線の自治体（京都市・滋賀県高島市）との連携や、民間主導の広域観光の取組である「鯖街道の日Project!」実施の協力により、戦略・地域コンセプトの構築・強化、PR事業の共同実施を実現している。
- 近隣の日本遺産との連携による広域マップ（『日本遺産ぐるっとマップ』）の作成により、日本遺産コンセプトの普及啓発を行うとともに、広域観光の推進を戦略的に実施している。

問い合わせ先

■ 小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会 事務局（小浜市産業部文化観光課）
電話：0770-64-6034　メール：rekishi@city.obama.lg.jp

＃029・ 平成28年度認定

飛騨匠の技・こころ
―木とともに、今に引き継ぐ１３００年―

申請者：◎**高山市**

ストーリー概要

「飛騨工（ひだのたくみ）制度」は古代に木工技術者を都へ送ることで税に充てる全国唯一の制度で、飛騨の豊かな自然に育まれた「木を生かす」技術や感性と、実直な気質は古代から現代まで受け継がれ、高山の文化の基礎となっています。市内には中世の社寺建築群や近世・近代の大工一門の作品群、伝統工芸など、現在も様々なところで飛騨匠の技とこころに触れることができます。

これは私たちが木と共に生きてきた１３００年の高山の歴史を体感する物語です。

将来像（ビジョン）

・飛騨匠の技とこころが飛騨高山の文化の基底をなしているというストーリーを市民が共有し、誇りを持って語ることができるまち
・飛騨匠の技とこころが飛騨高山の魅力として広く理解され、多くの来訪者にとって飛騨匠が残した作品や伝統技術等に触れることができるまち
・伝統的な建築や工芸のみならず、モノ作りの聖地として飛騨高山が評価され、様々な産業に飛騨高山ブランドが浸透しているまち

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■高山陣屋御蔵
高山陣屋の設置に伴い、高山城三の丸にあった米蔵が移築され高山御蔵となった。現存する江戸時代の米蔵として国内最大規模の建物といえる

■高山祭屋台
大工、彫刻、漆をはじめ、錺金具、鍛冶など高山職人たちの技術の枠を結集してつくられた傑作

■一位一刀彫
色彩を施さず、一位の木が持つ木の美しさを生かした彫刻

（2）戦略立案：事例2

行政計画への位置づけ及びPDCAサイクルを回す仕組みの整備

事例サマリー

- 各種行政計画（高山市第八次総合計画、第３期高山市教育振興基本計画、高山市産業振興計画、高山市SDGs未来都市計画）の中で、日本遺産の位置づけを明確に示し、進捗管理が行える体制を整えている。
- 外部アドバイザーとの連携しながら、PDCAを回す仕組みが整備されている。

戦略立案における取組内容

＜概要＞

- 高山市が策定する行政計画（高山市第八次総合計画、第３期高山市教育振興基本計画、高山市産業振興計画、高山市SDGs未来都市計画）に日本遺産事業を位置づけている。
- 総合計画やブランド戦略においてもストーリーの根幹である「飛騨の匠」を共通的なテーマに置くなど、「良いものを作る」ものづくりにおける考え方、精神を踏まえた計画策定に取り組んでいる。
- こうした「飛騨の匠」をテーマとしたビジョンの実現に向けて、策定した計画の進捗を管理できるよう、５課（文化財課、ブランド戦略課、海外戦略課、観光課、商工振興課）の推進会議を設け、組織体制を整備するなど、PDCAサイクルを回す仕組みを整備している。さらに、外部アドバイザーによる助言を受けることで、整備・観光事業化・普及啓発などのアクションの実行に反映している。

▼ 外部アドバイザーの関与により実現した事業例

- 平成29年度「こくふまちづくり協議会」と日本遺産の活用を含む意見交換を行い、国府町の日本遺産巡りツアーを実施し約50名が参加するなど、アイデアの実現に繋がっている。
- 令和４年度には、国府地域で造成中のツアーコース（Eバイクでのガイドツアー）について、アドバイザーがモニターツアーを体験し、ツアーの事業主体と意見交換、アドバイスを行うことで、事業の着実な実現につながるなどしている。

Eバイクでのガイドツアーの様子

取組の背景・経緯

＜外部アドバイザー就任の背景・経緯＞

- 市内産業の課題などについて、具体的な指導や助言をいただくため、それぞれの分野で専門的な見識を活かし活躍している6人の方々に、平成27年度から高山市経済観光アドバイザーを委嘱している。
- 現在もアドバイザーとしての関与に加え、日本遺産を冠においたイベントの開催や、シンポジウムのコーディネーターとして関与がある。

取組における工夫点

＜Point①：行政計画への積極的な位置づけによる推進体制の強化＞

- 高山市が議会や市民の意見を踏まえ策定する行政計画に日本遺産の取組を積極的に位置づけることで、予算の獲得や、市内における日本遺産の取組の活性化につながった。
- また、行政計画に位置づけることで、庁内の関係課でつくる推進会議において、定期的な事業実施の管理と、関係課による調整、推進体制の確立が実現できている。

＜Point②：外部アドバイザーを活用したPDCAサイクルの確立＞

- ブランド戦略に定めた全庁事業における実施計画の進捗を確認しつつ、外部アドバイザーの助言を受けることで飛騨高山ブランドの確立に繋がっている。
- また、ツアー造成や改良において、経済観光アドバイザーによる助言により、経済的利益を踏まえたコース設定を実現した。

問い合わせ先

高山市飛騨匠日本遺産推進協議会（高山市教育委員会事務局文化財課内）
〒506-8555　岐阜県高山市花岡町2丁目18番地 TEL:0577-35-3156/FAX:0577-35-3172/Email:bunkazai@city.takayama.lg.jp

(3)人材育成

取組推進のポイント

- 地域活性化計画等を効果的に実行していくためには、担い手となる人材の育成・確保が不可欠。また地域内で中長期的に日本遺産事業に携わる人材が必要。
- 外部の専門家によるコーチ ングや大学との連携による知見・ノウハウの提供、中長期的な人材育成の観点からの学校教育との連携等を充実させることが重要。
- 文化資源の活用に取り組む事業者・人材が既に存在している場合も多くみられる。これらの事業者・人材の取組において、日本遺産を取り入れることで付加価値を提供できるよう連携することも重要。

キーテーマ	構成市町村	ストーリー
1 ストーリーを維持・磨き上げを行う担い手の確保・育成	◎淡路市・洲本市・南あわじ市	『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」 ～古代国家を支えた海人の営み～
2 外部専門家や大学等との連携による人材育成	◎奈良県（明日香村・橿原市・高取町）	日本国創成のとき ～飛鳥を翔（かけ）た女性たち～
3 多様な地域プレイヤーの育成による日本遺産の活用促進	◎福井県（小浜市、若狭町）	海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 －御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－

＃030・ 平成28年度認定

『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」
～古代国家を支えた海人の営み～

申請者： ◎**淡路市・洲本市・南あわじ市**

ストーリー概要

『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」の中で最初に生まれる特別な島として描かれた淡路島。その背景には、古代国家形成期に重要な役割を果たした“海人”とよばれる海の民が深く関わっていました。その歴史は弥生時代の先端技術である金属器文化をもたらし、古墳時代には塩や海産物の生産に携わるとともに巧みな航海術を駆使してヤマト王権を支え、奈良時代には海人が生産する塩や海産物が献上され、天皇の食膳を司る「御食国」としての島の姿を形づくりました。この“海人”とよばれた海の民の足跡は、貴重な遺跡や出土品をはじめ、多くの万葉歌人に詠まれた美しい景勝地、そして島内各所で味わうことのできる豊かな食材にみることができます。

将来像（ビジョン）

淡路島は、古来「国生みの島」「御食国」と呼ばれ、伊弉諾神宮や松帆銅鐸、五斗長垣内遺跡、淡路人形浄瑠璃等に代表される歴史遺産やストーリーのほか、都市近郊の「島」という立地特性、さらには鳴門海峡の渦潮や成ケ島など多くの資源・魅力に恵まれている。日本遺産ストーリーの中心に位置する“海人”の調査研究を通して明らかになる「島」ならではの歴史文化や風土に魅力を感じる美しく魅力ある観光の島、誇りと愛着を持って住み続けることができる島、そして都市が抱える諸問題から解放され、安全安心で心豊かに暮らせる島として、アフターコロナ社会における誰もが訪れたい・住みたいと思うスマートシティ“スマー島”を目指す。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■伊弉諾神宮
日本最古の神社とされており、伊弉諾尊・伊弉冉尊を御祭神とする神宮。

■洲本市立淡路文化史料館
淡路島の考古・歴史資料や美術工芸品を展示。構成文化財である慶野銅鐸等が展示されている。

■南あわじ市滝川記念美術館　玉青館
構成文化財である松帆銅鐸が展示されている。弥生時代を再現したVR体験ができる施設。

（3）人材育成：事例1

ストーリーを維持・磨き上げを行う担い手の確保・育成

事例サマリー

- 地域プロデューサーに民間企業を登用し、各事業の立ち上げ支援を依頼。実行は企業と行政で連携することで、自走化を図りつつ、定期的な振り返りにより事業体制の見直しを行っている。
- ガイド要請後の稼働に繋がらないことから事業の見直しを行い、インバウンド対応に向けた既存ガイドの高度化とより日本遺産の裾野を広げるためのサポータークラブの設立・運営に方針転換を行い取組を行っている。

人材育成における取組内容

＜概要＞

- プロモーションを得意とする民間企業と、プロデューサー契約を締結し、淡路島日本遺産のストーリーを発信するだけでなく、様々な取組を推進するにあたって生じる課題の解決や日本遺産を通じた地域の活性化等に対し、指導・助言等を受けるなどしている。
  ※委託金額は約30万円ほど
- 特に、日本遺産認定を契機に取組を始める事業などついては、立ち上げに向けた助言を受け、日本遺産事業の迅速な立ち上げにつながった。
- 具体的には、ボランティアガイドの育成や、淡路島日本遺産サポーターの養成、淡路島日本遺産ワークショップの開催、ガイドムービーの制作、配信等の立ち上げを行った。
- 現在は、プロデューサー契約を解消し、プロモーション領域において企業と連携をとりつつ、その他の事業においては、効果を踏まえて事業改善に取り組んでいる。
- 観光協会が事務局を担うことによって、柔軟な事業アイデアの展開や、迅速な事業立ち上げが実現できている。

▼ 提携事業者概要

➢ 関西を拠点に、障がい者福祉・都市農業・伝統工芸・地域活性化・地域食堂・教育分野など、ソーシャルビジネスの取組をプロデュースしている企業。

取組の背景・経緯

＜背景・経緯＞

- 日本遺産認定を受けたものの、事務局として、地域プロデューサーの獲得に悩んでいた。
- 日本遺産プロデューサーとして、大阪を拠点に活動する民間企業を知り、連携を開始。
- 日本遺産認定を契機に取組を始める事業において必要な事業や、立ち上げに向けた支援を受ける。
- 事業が安定化し、観光協会を中心に人材の育成及び事業の自走化が進んだためプロデューサー契約は解除し、事業のPDCAは観光協会が取り組み始める。
- 一部プロモーション領域はこれまでの取組を把握している同社に発注し、継続的な連携及び日本遺産ストーリーの発信を行っている。

取組における工夫点

＜Point①：事業立ち上げにおける民間企業の活用＞

- 事業立ち上げ黎明期に、地域プロデューサーとして民間企業と契約することで、事業立ち上げのノウハウや、日本遺産事業の展開を実現するためのアプローチを支援してもらうことで、迅速な事業の立ち上げと、協議会内部及び事業運営を担う観光協会の人材育成につながった。
- 観光協会による事業の自走化が進んだ段階で、地域プロデューサーの契約を終了しつつ、事業の見直しを行い、各事業の高度化に取り組み始めている。

＜Point②：サポーターの育成による、日本遺産を支える裾野の拡大＞

- 当初ガイド養成事業に取り組んでいたものの、無料ガイドの飽和状態と稼働がない状況が生まれてしまうことを懸念し、取組の方向性の見直しを実施。
- インバウンドの拡大に向け、既存ガイドの質の向上や、日本遺産を知り、応援し広げてもらう文化醸成を図るためのサポーター育成に、方針を転換し取組を推進している。

問い合わせ先

■ 淡路島日本遺産委員会（一般社団法人淡路島観光協会内）　TEL：0799-22-0742

＃011・平成27年度認定

日本国創成のとき　～飛鳥を翔（かけ）た女性たち～

申請者：**奈良県（明日香村・橿原市・高取町）**

ストーリー概要

日本が「国家」として歩み始めた飛鳥時代。この日本の黎明期を牽引したのは女性であった。
この時代の天皇の半数は女帝であり、彼女たちの手によって、新たな都の造営、外交、大宝律令を始めとする法制度の整備が実現された。また、文化面では、女流歌人が感性豊かな和歌を高らかに詠い上げ、宗教面では、尼僧が仏教の教えを広め、発展させるなど、政治・文化・宗教の各方面で女性が我が国の新しい"かたち"を産み出し、成熟させていった。
日本国創成の地である飛鳥は、日本史上、女性が最も力強く活躍した場所であり、その痕跡が色濃く残る地である。

将来像（ビジョン）

① 『歴史』『文化』『自然』が息づき 多様な交流が育める 魅力ある“飛鳥”
② 日本遺産を物語る飛鳥の歴史・文化・自然などの地域資源を活用し、来訪者が楽しんで回遊したり、ゆっくりと滞在しながら飛鳥の魅力を体感し、交流できる空間や仕掛けを創出し“人”“地域”“産業”が元気になる地域づくりを目指す。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

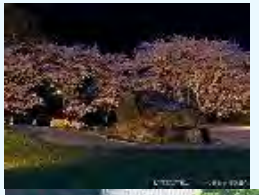
■藤原宮跡／国特史

天武天皇と女帝持統天皇合作の都城藤原京の中心をなす宮殿跡。

■牽牛子塚古墳・越塚御門古墳／国史跡

牽牛子塚古墳は八角形の古墳で、斉明女帝とその娘の間人皇女の陵墓であるとの説がいまは有力。越塚御門古墳が孫娘である大田皇女の墓と考えられている。

■石舞台古墳／国史跡



国営飛鳥歴史公園内石舞台周辺地区の中央に位置するわが国最大級の方墳。
春には周辺で、夜桜のライトアップを実施。

（3）人材育成：事例2

外部専門家や大学等との連携による人材育成

事例サマリー

- 長い実績を持つ観光ガイドボランティアに対して、日本遺産ストーリーについての継続的な研修を実施しているほか、専門講師として有料ツアーで解説を担える「プロフェッショナルガイド」や旅行者の立場に立って歴史の流れや全体観から日本遺産を語れるホスピタリティ型の「語り部」を育成。
- プロフェッショナルガイド、語り部育成に関しては、外部専門家と連携し、より付加価値の高いガイドの養成を行っている。

人材育成における取組内容

＜概要＞

- **観光ボランティアガイドに対する日本遺産ストーリーの研修**
  日本遺産認定以前より活動している観光ボランティアガイドに対して定期的に日本遺産ストーリーについての研修を行い、日本遺産「飛鳥」の視点も加えて包括的に語るガイドを養成している。
- **ホスピタリティ型ガイドの「語り部」を育成**
  観光ボランティアガイドの中から、旅行者の立場に立って、日本遺産をナビゲートできる「ホスピタリティ型」の語り部を育成。飛鳥女史のストーリーや日本遺産に関する専門的知識の習得、旅行者の安全を図りながら楽しませる技能の習得等によるガイドのスキルアップを行う。
  現在、４名の「語り部」がクラブツーリズムで販売されている日本遺産ツアーなどで活躍している。
- **プロフェッショナルガイドの育成**
  日本遺産や世界遺産を含め総合的に解説できるプロフェッショナルガイド（ビジネスとして独立して活躍できるレベル）の養成を実施。専門的知識の獲得だけではなく、多言語化にも対応し、来訪者の有する知識や年齢等に合わせたきめ細かな解説等が実施できる人材を養成している。現在全国から集まった20名が候補生として研鑽を積んでおり、令和5年度のプロフェッショナルガイド誕生を目指している。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 専門家としてガイドできる人材が必要とされ、プロフェッショナルガイドの育成を開始。
- 日本遺産のツアー造成にあたり、観光客と一緒に巡りながら日本遺産のストーリーをナビゲートできる人材が必要であった。

＜経緯＞

- R3 「語り部」の養成とツアーの造成を実施
- R3 プロフェッショナルガイド育成に向けた取組開始

取組における工夫点

＜Point①：観光を意識したガイド人材の育成＞

- 有料ツアーのガイドにあたっては、文化財の知識だけではなく、それをどう伝えていくかというテクニックも重要となる。そのために、観光学の視点からの人材育成に注力している。
- 阪南大学の国際観光学部国際観光学科の教授である来村多加史氏が、プロフェッショナルガイドおよび語り部の育成事業についてアドバイザーとして関わっている。

＜Point②：外部専門家と連携した「語り部」の育成＞

- 日本古代史・女性史が専門の京都女子大学名誉教授瀧浪貞子氏による「語り部」育成研修を行う。瀧波氏は日本遺産ストーリーを紹介した「飛鳥女史紀行」の監修も行っている。
- 瀧波氏と構成文化財で実地研修を行うことで、ガイド（語り部）のスキルアップ及び新たな地域の魅力発見や自身の意識向上などに繋がった。

語り部育成講座の座学（左）／飛鳥宮跡（伝飛鳥板蓋宮跡）でのフィールドワーク（右）

問い合わせ先

■ 日本遺産「飛鳥」魅力発信事業推進協議会事務局
■ 〒634－0141　奈良県高市郡明日香村川原91番地の3　TEL0744－54－5600　FAX0744－54－5602
■ E-mail bunkazai@robutori-asika.jp　■ホームページ https://asuka-japan-heritage.jp/

＃005・平成27年度認定

海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群
－御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－

申請者：**福井県（小浜市、若狭町）**

ストーリー概要

若狭は、古代から「御食国」として塩や海産物など豊富な食材を都に運び、都の食文化を支えてきた地である。また、大陸からつながる海の道と都へとつながる陸の道が結節する最大の拠点となった地であり、古代から続く往来の歴史の中で、街道沿いには港、城下町、宿場町が栄え、また往来によりもたらされた祭礼、芸能、仏教文化が街道沿いから農漁村にまで広く伝播し、独自の発展を遂げた。近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群沿いには、往時の賑わいを伝える町並みとともに、豊かな自然や、受け継がれてきた食や祭礼など様々な文化が今も息づいている。

将来像（ビジョン）

近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群が、単に鯖を運んだだけでなく、若狭から京都へ、京都から若狭へ様々な文化をもたらした交流の道であることが注目されている。特に、和食が大成した京都の食文化を形成してきた「御食国」の歴史は今も続いており、食文化と祈りの場である社寺、祈りの民俗行事、食材を育む自然を一体的に発信活用することにより、京都を中心とした京阪神地区の食の都、そして京都に訪れる多くの観光客が食の根幹を求めて訪れるストーリーや基盤を整え、交流人口の拡大と地域全体の活性化を図っていく。いにしえには、「京は遠ても十八里」と呼ばれた文化交流をもとに、北陸新幹線全線開業を目論み「京は遠ても十八分」というスタンスを打ち出し、京都郊外観光地として京都との一体化を図っていく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■旧古河屋別邸・庭園／建造物（県指定）

江戸時代の回船問屋「古河屋」全盛の時代、文化12年（1815）に建築された建物並びに庭園。

■放生祭／無形民俗文化財

毎年9月第３土日に旧小浜地区24区のうち12区が伝統の神事芸能を八幡神社に演舞奉納する祭。

■熊川宿／国重伝建

若狭街道ルートの物流の中継拠点。軍事上、物流上の要衝として重要な役割を担った宿場町。

（3）人材育成：事例3

多様な地域プレイヤーの育成による日本遺産の活用促進

事例サマリー

- 協議会及びプロジェクトリーダーが戦略的に事業展開し、地域事業者等が様々な場面で日本遺産に触れ、学ぶ機会や構成文化財等を活かす機会を得ることで、多様な地域プレイヤーの育成や発掘、マッチング機会の創出につながっている。

人材育成における取組内容

＜概要＞

- 御食国アカデミー後継者育成事業として、日本遺産に直接関わる人物に焦点を当て、これまでの取組の紹介や地域住民との協働事業の実施を促進し、新たな日本遺産を活かす人材の育成を行っている。
- 御食国食の学校人材育成事業において、3名の地域おこし協力隊を受け入れ、食のまちづくり講義、食文化に関する講義と実習等を必須カリキュラムとして受講することで、日本遺産ストーリーの根幹である食や食文化を共有・理解した食関連産業人材を育成し、飲食店や料理人の起業・開業を促進している。
- 熊川宿では、エリア開発法人が地域のプロジェクトリーダーとしてアドベンチャーツーリズム等を牽引する中で、同地区内のシェアオフィスに事務所を設けるアウトドア事業者による、熊川宿の里山暮らしを体感できるアクティビティ体験の販売が開始され、民間事業として滞在コンテンツ造成・販売が進められている。
- 日本遺産に関するワークショップを毎年継続的に開催し、令和3年には新たな滞在コンテンツ開発や環境整備、学び、体験の場の開催など計14回実施した。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 当該日本遺産は、多様な構成文化財によってストーリーが構成されており、各ストーリーの相互関係により様々な事業展開が期待される。そのためには下支えする多様な地域プレーヤーの育成及びマッチングとともに、総合して事業展開する戦略的なプロジェクトリーダーが必須となっている。

＜経緯＞

- 令和3年度には、既存のプロジェクトリーダー（地域DMO）が中心となって、熊川宿のエリア開発会社設立に向けた検討会が重ねられ、設立に至り、滞在コンテンツや商品の開発・運営を牽引する組織体制が整えられた。

問い合わせ先

■ 小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会 事務局（小浜市産業部文化観光課）
電話：0770-64-6034　メール：rekishi@city.obama.lg.jp

- 既存ガイドの育成とともに、様々な産業界や性別・年齢層を問わずに、地域プレーヤーの育成を行う事業を御食国アカデミーと関連させながら実施している。

取組における工夫点

＜ Point：地域事業者等が様々なテーマで日本遺産を学ぶ機会の創出＞

- 御食国アカデミーの一環として、市民対象の学習講座「日本遺産大学」を開講し、観光・まちづくり・歴史文化・商品開発など多岐のテーマに及ぶ学習講座を年５回程度実施し、ワークショップも行っている。また、「日本遺産女子大学」として、女性目線による歴史文化を活かした地域活性化に係る人材育成も実施している。
- 既存のボランティアガイドをコンシェルジュとして成長させるため、語り部ガイドブックの作成と定期的な学習会を実施し、コンシェルジュ育成を図っている。
- 英語力のある市民を対象に、京都のインバウンドガイドや旅行専門家を招き、ガイド方法等を研修し、英語コンシェルジュを育成している。また、英語パンフレット作成などの事業には積極参画を誘導。現在、育成者は若狭おばま観光インフォメーションセンター等で勤務している。
- 写真や映像、文章作成等の専門家とともに、地域で日本遺産を支えるローカルヒーローの取材を行い、参加者及び関係者のシビックプライド醸成を図るローカルラーニングツアー事業を複数年実施し、専用WebサイトやSNS等を通じて発信するローカルメディアチームとしての育成を図り、人材発掘と育成を一貫して実施した。

(4)整備

取り組み推進のポイント

- 構成文化財における受入環境整備（ストーリーに関する解説の整備・多言語化等）を行い、付加価値を生み出す。
- 宿泊施設、交通アクセス等の環境を整備する。
- 来訪者の導線に合わせて文化資源や景観・風景のを整備する。
- 日本遺産センター等の拠点整備やサブストー リーの抽出等を行う。

キーテーマ	構成市町村	ストーリー
1 来訪者目線でストーリーの理解を促す展示改善の工夫	◎佐賀県（唐津市・伊万里市・武雄市・嬉野市・有田町）、長崎県（佐世保市・平戸市・波佐見町）	日本磁器のふるさと　肥前 ～百花繚乱のやきもの散歩～
2 ストーリーを体験するための受入環境の整備	◎小松市	『珠玉と歩む物語』小松 ～時の流れの中で磨き上げた石の文化～
	◎愛媛県（今治市）、広島県（尾道市）	“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島 －よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶－
	◎安来市、雲南市、奥出雲町	出雲國たたら風土記 ～鉄づくり千年が生んだ物語～

＃037・ 平成28年度認定

日本磁器のふるさと　肥前　～百花繚乱のやきもの散歩～

申請者：◎**佐賀県（唐津市・伊万里市・武雄市・嬉野市・有田町）、長崎県（佐世保市・平戸市・波佐見町）**

ストーリー概要

陶石、燃料（山）、水（川）など窯業を営む条件が揃う自然豊かな九州北西部の地「肥前」で、陶器生産の技を活かし誕生した日本磁器。肥前の各産地では、互いに切磋琢磨しながら、個性際立つ独自の華を開かせていった。その製品は全国に流通し、我が国の暮らしの中に磁器を浸透させるとともに、海外からも賞賛された。

今でも、その技術を受け継ぎ特色あるやきものが生み出される「肥前」。青空に向かってそびえる窯元の煙突やトンバイ塀は脈々と続く窯業の営みを物語る。この地は、歴史と伝統が培った技と美、景観を五感で感じることのできる磁器のふるさとである。

将来像（ビジョン）

肥前窯業圏をストーリーで感じてもらえるよう、窯元のほか観光業・飲食業などの民間事業者がそれぞれの役割に応じて魅力・伝統などを発信していく。また、民間事業者と協議会による協働での取組を通して、来訪者が繰り返し肥前窯業圏を訪れ交流人口が増えていくことで、民間事業者だけでなく地域住民などにも波及効果が生まれていくようなサイクルが生まれる地域を目指す。さらに、肥前窯業圏の魅力や伝統が地域住民の誇りや愛着となるよう、適切に保存・活用・継承していく。

そのために、地域住民の誇り醸成、魅力を感じる場づくり（受入体制の強化）、日本遺産と観光を結び付けた情報発信と広域的な観光振興、推進体制の強化などに取り組む。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■有田内山伝統的建造物群保存地区
有田の磁器生産の中心地であった内山地区に立ち並ぶ窯元ややきもの商家。近代には洋風建築も加わった。

■やきもの市（有田陶器市など）
肥前窯業の各産地（唐津・伊万里・武雄・嬉野・有田・佐世保・波佐見）で行われるやきもの市。

■肥前波佐見陶磁器窯跡（畑ノ原窯跡）
16世紀末から近代にかけて操業した窯跡。世界最大級の巨大な登り窯は、磁器の大量生産を可能とした。

（4）整備：事例１

来訪者目線でストーリーの理解を促す展示改善の工夫

事例サマリー

- 日本遺産ストーリーを伝える場として佐賀県立九州陶磁文化館常設展示を一部リニューアルし、興味・関心の薄い方にもわかりやすい展示とした。
- 単に陶磁器を展示するのではなく、来館者にストーリーが伝わる工夫として、デザインや照明、資料等の配置方法、小分けにした展示空間を巡る設営、デジタル解説板などの展示改善を実施。
- 佐賀県立九州陶磁文化館への来館者が各窯元まで立ち寄ることや、逆に窯元から九州陶磁文化館へ来館するような相互送客を目指している。

整備における取組内容

＜概要＞

- 佐賀県立九州陶磁文化館は肥前の陶磁器をはじめ、九州各地の陶磁器に関し、その文化遺産の保存と陶芸文化の発展に寄与するため昭和55年に設立。
- 歴史的・美術的・産業的に重要な資料を収集・保存・展示し、調査研究や教育普及の活動を行っている。
- 令和4年4月に常設展示の一部をリニューアルし、日本遺産ストーリーの根幹であるやきもの文化を体感してもらうための工夫を凝らしている。
- 館内にはやきもののストーリー展示のみならず、コレクションや美しい映像による展示の他に、絵付けのセルフデザインが楽しめるコンテンツが設置されている。
- 館内にはカフェも設置。ドア押板など、ありとあらゆる場所にやきもののデザインが施されており、どこにいても楽しめる仕様となっている。
- 入館料は無料となっている。年に数回のテーマ展や特別企画展（有料の場合あり）等も開催されている。

取組の背景・経緯

- 平成28年に日本遺産登録後、令和4年4月、九州陶磁文化館の常設展示リニューアルを実施。

▼ 日本磁器の特徴を解説

▼ 用途に応じた分かりやすい解説

取組における工夫点

＜Point①：ストーリーの理解を促す展示の工夫＞

- 来館者がストーリーを理解しやすくなるよう、歴史的背景の解説から始まり、日本磁器の技術・デザインの特徴、現在の状況を順序立てて展示している。また、全てのキャプションに日英併記を行い、外国人観光客も楽しめる環境となっている。
- 加えて、テーマ毎に展示室を配置し、導線やデザインの工夫、さらには単に陶磁器を展示するのではなく、用途が分かるような展示をするなど、誰もが楽しめ飽きさせない工夫がされている。

＜Point②：受入環境の整備による地域とのシナジー創出＞

- 来訪者の興味関心を引き立たせる工夫として展示の後半に「やきもの産地マップ」を展示し、来館者の日本遺産の肥前窯業圏への周遊を促している。
- 地元窯元でのワークショップを経験した観光客が、館を訪れることもあるなど、相互誘客につながっている。

▼ 蒲原（かんばら）コレクション

▼ やきもの産地マップ

出典：2022年4月　常設展示リニューアル｜佐賀県立 九州陶磁文化館 (saga-museum.jp)

問い合わせ先

■「肥前窯業圏」活性化推進協議会
事務局：佐賀県　文化・観光局　文化課　TEL：0952-25-7236　Mail:culture_art@pref.saga.lg.jp
長崎県　県北振興局　商工観光課　TEL:0956-24-5287

＃027・平成28年度認定

『珠玉と歩む物語』小松
～時の流れの中で磨き上げた石の文化～

申請者：**小松市**

ストーリー概要

小松の人々は、弥生時代の碧玉の玉つくりを始まりとして2300年にわたり、金や銅の鉱石、メノウ、オパール、水晶、碧玉の宝石群、良質の凝灰岩石材、九谷焼原石の陶石などの石の資源を見出し、時代のニーズに応じて、現代の技術をもってしても再現が困難な高度な加工技術を磨き上げ、ヤマト王権の諸王たちが権威の象徴として挙って求めるなど、人・モノ・技術が交流する豊かな石の文化を築き上げてきている。

将来像（ビジョン）

１．「次世代都市こまつ」へ

小松市の発展にキーとなる地域は、まさに日本遺産「石の文化」の構成資産がある里山地域と重なっており、これからの文化観光の資源として活かし磨き上げる。さらに、日本遺産「北前船寄港地安宅」とも連携し、「石の文化」と一体として取り組み、交流人口の拡大や里山への定住・関係人口の拡大を目指していく。併せて、小松市のアイデンティティとして根付く「歌舞伎のまち小松」とともに、「石の文化」とそこから派生する「ものづくり文化」について双璧を成すものとして、小松の代名詞となるよう取り組んでいく。

２．「石の文化」による持続可能な地域活性化

地域全体を「小松まるごとストーンミュージアム」と位置付け、「人づくり」をテーマに地域活性化に取り組んできた基盤を活かし、次世代に継承していくため「石の文化」を主目的とした「文化観光」を展開していく。日本遺産ストーリーが持つ「文化」・「交流」・「ものづくり」を体感することにより、交流人口、関係人口、定住人口の拡大につなげ、地域活性化を行う。また、九谷焼や石材産業など「ものづくり文化」も日本遺産ストーリーの柱であり、地元住民や観光産業に関わる人だけでなく、「ものづくり産業」の需要拡大につなげ、経済効果を生み出す好循環へシフトしていく。「文化観光」や「産業観光」、生業の発展による収益増だけでなく、関係人口の増加により税収額全体を維持させ、文化財の保存継承への再投資により、地域の文化や歴史が持続可能な「次世代都市こまつ」を目指していく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■八日市地方遺跡出土品

弥生時代の王たちを魅了した碧玉製管玉など、東西交流の結節点といえる出土品群（重要文化財）。

■滝ヶ原石切り場

文化11年より現在も採掘が行われる緑色凝灰岩の石切り丁場。新旧石切り場が見学できる。

■九谷焼製土場（九谷セラミック・ラボラトリーほか）

陶石から九谷焼陶土（坏土）を製作するまでの工程を行う工場。昔ながらの工程を見学できる。

（4）整備：事例2

ストーリーを体験するための受入環境の整備

事例サマリー

- 市内各地に分散する構成文化財を巡るための拠点（タッチポイント）整備を着実に実現。
- 整備費用獲得のために企業版ふるさと納税等を活用し、交流・関係人口・拡大につなげる。
- 各整備後に、拠点施設や地区で活躍するプレイヤーの動きを活かした取組を展開。

整備における取組内容

＜概要＞

- 小松市立博物館３階に整備した「石の文化」常設展示を起点に、総合パンフレット及び受入地域側にある埋蔵文化財センターや尾小屋資料館の展示や解説看板を整備し、市内に広がる構成文化財が所在する拠点地域の見学につなげている。
- **拠点施設整備**：陶石から完成までのストーリーを体感できる九谷焼拠点施設九谷セラミック・ラボラトリーを整備。九谷焼窯元組合が運営し、体験事業に加え、人材育成や新商品開発、直販、ECサイト開設など販売強化も進んでいる。
- **活動拠点整備**：遊泉寺銅山跡をトレッキング等も楽しめる史跡公園、遊泉寺銅山ものがたりパークとして整備。鵜遊立地区の活動拠点では毎年イベントを開催し発信を続け、観音下地区でも石切り場跡にランドアートを誘致し、見学ガイドなどが行われている。
- **里山環境を活かした滞在型観光の推進**：各地の里山で民間企業が運営に参画するカフェや、滝ヶ原クラフトアンドステイや滝ヶ原ハウス等の宿泊施設・古民家宿泊施設、交流滞在施設の整備が進んでいる。
- **地区の受入環境の整備・発信**：石の文化レガシー認定制度により新たな構成文化財の掘り起こしを行い、尾小屋鉱山カラミのまち巡りツアー等を企画・整備した。

取組の背景・経緯

＜背景・経緯＞

- 認定後、こまつまるごとストーンミュージアムを合言葉に、市立博物館３階を起点に各拠点地域がつながるように各地の整備を進めた。
- 企業の応援もあり、九谷焼の粘土供給を支えつつ、発信や体験ができる施設が整備され、そこを拠点に窯元組合が中心となって事業を展開している。各拠点地域やものづくり企業間で組織が立ち上がり、活性化に取り組む動きが生まれている。行政は文化財の保存修理の推進等を担いながら協力して活性化を進めている。

取組における工夫点

＜Point①：こまつまるごとミュージアム構想を実現するための基盤整備＞

- 小松市立博物館を基点として、各拠点地域を巡ってもらうことを意識した総合パンフレット作成、各地の解説・誘導看板の設置、道路看板の整備等を行っている。
- ストーリーの一翼を担う「ものづくり文化」から産業観光「GEMBAプロジェクト」を展開し、当初より予約・決裁をオンラインとするなど定着へ向けた環境整備も進めている。
- 2024年の北陸新幹線小松駅開業に合わせて、回遊性向上に資するシェアサイクルや路線バス・コミュニティバス、オンデマンドバスなど二次交通の整備を進めている。

＜Point②：企業版ふるさと納税の活用による拠点整備＞

- 企業版ふるさと納税により、所縁のある企業や活動に共感する企業からの資金調達を実現し、九谷焼拠点施設や遊泉寺銅山跡の史跡公園整備の整備費に充てた。
- 整備した拠点は地元の組合や団体が運営や活用を担うことで様々な主体を巻き込み持続的な取組につなげている。

＜Point③：里山文化や里山資源の見直し＞

- 石の文化の拠点地域が多く分布する里山地域が活性化し、文化財建造物を活かした宿泊施設整備や石蔵を活用したギャラリー、カフェ、宿泊施設の整備が進んだ。
- 石切り場がある滝ヶ原地区や観音下地区では、地元団体が中心となり、見学ツアーやガイドを行っている。特に、滝ケ原地区では、料金を徴収し維持管理費に充てる仕組みを作った。

問い合わせ先

■ 小松市交流推進部文化振興課　〒923-8650　石川県小松市小馬出町91番地　電話(0761)24-8130　FAX (0761)23-6404

＃036・平成２８年度

“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島
－よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶－

申請者：**愛媛県（今治市）、広島県（尾道市）**

ストーリー概要

戦国時代、宣教師ルイス・フロイスをして"日本最大の海賊"と言わしめた「村上海賊」"Murakami KAIZOKU"。
理不尽に船を襲い、金品を略奪する「海賊」（パイレーツ）とは対照的に、村上海賊は掟に従って航海の安全を保障し、瀬戸内海の交易・流通の秩序を支える海上活動を生業とした。その本拠地「芸予諸島」には、活動拠点として築いた「海城」群など、海賊たちの記憶が色濃く残っている。尾道・今治をつなぐ芸予諸島をゆけば、急流が渦巻くこの地の利を活かし、中世の瀬戸内海航路を支配した村上海賊の生きた姿を現代において体感できる。

将来像（ビジョン）

① 地域内外での発信：日本固有の海賊（KAIZOKU）文化をブランディング化し、世界に発信することでインバウンドによる外資の引き込みを狙う。地域内では、調査研究と普及啓発を図り、地域の子どもたちに地元の海賊文化に触れてもらうことで、シビックプライドの醸成をはかり、将来的に地域の文化遺産の伝承者になってもらうことを目指す。
② 民間事業者との関わり：村上海賊を活用し、観光、海事産業、農林水産など、地域のあらゆる産業との融合をすすめ、体験メニューや関連商品を開発し、地域の経済と交流の活性化をはかる。
③ 海賊を通じた他地域との交流：日本各地の海賊文化をもつ地域との交流および共同研究を進め、さらなる魅力を発掘することで、海賊文化を盛り上げ、新たな価値を世界に発信していく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■能島城跡

能島村上氏の代表的な拠点海城。島全体を城郭化した点が特色。最もストーリーを体感できる構成文化財。

■村上海賊ミュージアム

能島村上氏の史料を中心に、ストーリーに沿った常設展を構成する博物館。ビジターセンターの役割を果たす。

■因島水軍城

因島村上氏の歴史・文化をストーリーに沿って紹介する城郭型資料館。ビジターセンターの役割を果たす。

（4）整備：事例3

ストーリーを体験するための受入環境の整備

事例サマリー

- ビジターセンターを起点に構成文化財に周遊することを想定し、タッチポイントの整備を行っている。
- ビジターセンターや案内看板の設置により構成文化財やストーリーについてわかりやすく伝えるとともに、様々な人々に気軽に日本遺産「村上海賊」に親しんでもらえる環境として、自転車利用者の動線上に案内看板、インバウンド受入に向けた多言語対応等を整備している。

整備における取組内容

＜概要＞

- **日本遺産ビジターセンターの設置**
  来訪者が気軽に村上海賊について学べる日本遺産ビジターセンターを尾道市に5件、今治市に2件設置。尾道側の2件はヤマト運輸営業所内にあり、手荷物預かりサービスや商店街一括免税サービス等、様々な観光サービスを連携して行っている。今治側のビジターセンターについては観光物産施設及び村上海賊ミュージアムに併設しており、日本遺産と観光が融合され相乗効果を生み出している。
- **日本遺産案内看板の設置**
  構成文化財や主要観光ルート上に日本遺産ストーリーを伝える案内板を設置。QRコードから多言語対応したWebサイトへ誘導している。
- **多言語解説システムの導入**
  村上海賊ミュージアムでは、スマートフォンを利用して多言語解説を聞くことができる。アプリなどをダウンロードする必要が無く、海賊に興味を持つ海外の人々もわかりやすく学べる。

MAPとリンクした英語版サイト

取組の背景・経緯

＜背景＞

- ビジターセンターを起点に構成文化財に周遊することを想定し、タッチポイントの整備を行っている。
- ビジターセンターや案内看板の設置により構成文化財やストーリーについてわかりやすく伝えるとともに、様々な人々に気軽に日本遺産「村上海賊」に親しんでもらえる環境を整備している。

取組における工夫点

＜Point①：自転車利用者の動線に配慮した案内看板の整備＞

- 「瀬戸内しまなみ海道」へは多くのサイクリストが来訪している。日本遺産のストーリーに触れながらサイクリングを楽しめるように、因島内のサイクリングコース及び一般道路脇に案内看板を設置することで、構成文化財の城跡や名勝地への誘導を分かりやすく行った。

自転車利用者の動線上にある案内看板

＜Point②：インバウンド受け入れに向けた環境の整備＞

- 訪日外国人が西洋のパイレーツと異なるKAIZOKU の概念を理解してもらえるよう、多言語解説を充実させている。
- Webサイトや村上海賊ミュージアムによるスマホ解説は英、中（繁）、中（簡）韓、仏の多言語で対応している。また、主要なスポットには英語・日本語が併記された案内板の設置やルート案内として活用できるWebマップと連動した英語版サイトを作成した。

問い合わせ先

- 〒794-8511　愛媛県今治市別宮町1-4-1
- 今治市総合政策部交流振興局文化振興課日本遺産推進係
- TEL 0898-36-1608　　FAX 0898-24-2008　　Mail:bunka@imabari-city.jp

＃034・平成28年度認定

出雲國たたら風土記
～鉄づくり千年が生んだ物語～

申請者：**安来市、雲南市、奥出雲町**

ストーリー概要

日本古来の鉄づくり「たたら製鉄」で繁栄した出雲の地では、今日もなお世界で唯一たたら製鉄の炎が燃え続けている。たたら製鉄は、優れた鉄の生産だけでなく、原料である砂鉄の採取跡地を広大な稲田に再生し、燃料の木炭となる山林を永続的に循環利用するという、人と自然とが共生する持続可能な産業として日本社会を支えてきた。また、鉄の流通は全国各地の文物をもたらし、都のような華やかな地域文化をも育み、今もこの地は、神代の時代から先人たちが刻んできた鉄づくり千年の物語が終わることなく紡がれている。

将来像（ビジョン）

「たたら製鉄」は、単に良鉄をつくり出しただけでなく、鉄穴流しによる砂鉄採取法によって山を切り崩した跡地を棚田へと再生してきた。燃料である木炭生産は単に木々を伐採するのではなく、数十年サイクルで循環させることで広大な森林を守ってきた。たたらは自然と共生した産業であり、影響を受けてきた自然や景観、食などこの地独自の文化は今日も続いている。

私たちが目指すものは、たたらが生み出したこの地域こそ現代社会が求めているSDGs（持続可能な開発目標）の原点であること、世界でオンリーワンの技術であるたたらが日本の発展を支えてきたこと、そして今でも息づいていることなどを、地域住民あるいは事業者自らが再認識することでストーリーの価値を知り、地域外の人々や観光客に、その魅力を自ら語ることができることである。そして、来訪者がたたら製鉄のすばらしさを体感し、圏域内住民はこの地に住んでいることに誇りと愛着を持つことを目標としている。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■菅谷たたら山内

操業当時の姿が世界で唯一現存し、たたら製鉄が盛んであった往時を彷彿とさせる。

■奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観

砂鉄を採取した鉄穴流しの跡地は、棚田として整備され今に輝きを放つ。

■安来節

鉄の積出港として栄えた安来で生まれた民謡。 軽快な歌声は港町の賑わいに花を添えた。

ストーリーを体験するための受入環境の整備

事例サマリー

- ガイダンス施設である7施設に、共通のシンボルサインやエリアマップ等を設置し、基礎的な情報提供を実施しているだけでなく、特に広域からの玄関口にあたる3施設をゲートウェイ機能を持つ拠点施設として位置づけ、ストーリーを分かりやすく伝えるよう工夫された展示を実施するとともに、来訪者への情報発信・利便性向上を図り、周遊を促進するための案内機能を確保している。

整備における取組内容

＜概要＞

- 拠点づくりや説明板設置、マップ・パンフレット制作やモデルコースの設定、多言語案内等を行い、来訪者の利便性を向上しつつ、構成文化財の保存・継承を行い、日本遺産ストーリーや構成文化財を紹介する基盤を整えている。
- **拠点づくり**：ガイダンス施設である7施設（和鋼博物館、金屋子神話民俗館、奥出雲たたらと刀剣館、角炉伝承館、古代鉄歌謡館、鉄の歴史博物館、菅谷たたら山内）に3市町の構成文化財をまとめた案内板をそれぞれ設置し、来訪者への情報提供を実施した。また、各施設に共通のシンボルサイン、たたらエリアマップ、各種パンフレット等を設置し、ガイダンス機能を整備している。
- **構成文化財の説明板設置**：構成文化財の解説や多言語表記、最寄りの構成文化財の距離等を記載した、日本遺産「出雲國たたら風土記」構成文化財プレートを各所に設置し、来訪者の利便性の向上を図っている。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 「たたら」（日本古来の製鉄法）は1400年間、この地に息づく産業であり、圏域には独特の文化や景観・風俗が存在している。
- 昭和62年、たたら製鉄の歴史文化をともに歩んできた６市町村が、鉄の道文化圏推進協議会を組織し、「鉄の道文化圏」を結成。各地域に拠点となるたたら製鉄ゆかりのテーマを持った施設整備等を行った。平成の市町村合併を経て現在の2市1町にその理念は引き継がれ、35年以上にわたり同協議会が運営されている。

＜経緯＞

- 平成28年度の日本遺産認定を契機に、「たたら」のストーリーを観光振興や地域活性化に結び付けていくことで「鉄の道文化圏」というエリアブランドの確立を図っている。
- 31件の構成文化財個別の活用に留まらず、今後はより一層、文化・景観・民俗・風土等を含めた「ストーリー」での活用及び付加価値化、それらの地域経済への寄与が求められている。

取組における工夫点

＜Point：ゲートウェイ機能の確保による案内機能等の強化＞

- 日本遺産を説明する施設が点在していたところ、日本遺産ガイダンス施設である７施設のうち、①各市町の拠点施設、②圏域内への流入ルートにあたる施設（松江・米子方面、広島方面、岡山方面）、③来訪者の情報収集の利便性向上・周遊促進・地域経済への波及等を勘案し、**３施設（和鋼博物館、奥出雲たたらと刀剣館、菅谷たたら山内）をゲートウェイ施設と位置づけ**、施設間で統一感を持って、全体のストーリーが伝わりやすい案内機能を強化することで、**ガイダンス機能の充実**を図っている。

- 各拠点で「分かりやすく伝える」ために、体験設備の整備や補助解説資料の配布、再現映像等により、ストーリーを分かりやすく伝えるよう案内をしている。

  - **和鋼博物館：**映像及び体験学習（ふいご踏み体験、日本刀体験等）を取り入れた展示、補助解説資料配布、子供用解説資料配布、多言語解説配布など、初心者にも分かりやすい展示環境を整えている。

  - **奥出雲たたらと刀剣館：**たたら製鉄の歴史や国選定保存技術、日本刀に関する展示だけでなく、棚田の景観形成プロセスの理解を促す展示やミニ鉄穴流し体験設備の整備、ミニミニたたら体験の開発を行っている。

  - **菅谷たたら山内：**たたら製鉄に従事した人々が生活した集落と合わせて見学が可能であり、地元在住のガイドによるユーモラスで分かりやすい解説を聞くことができる。

問い合わせ先

■ 島根県奥出雲町（定住産業課）　電話：0854-54-2524

(5)観光事業化

取組推進のポイント

- ストーリーを体現するような商品開発や産業創造に取り組む。
- 個々の構成文化財を活用し、日本遺産のストーリーに触れることができる事業を実施する。

キーテーマ	構成市町村	ストーリー
1 ストーリーを体現する商品・事業の開発	◎佐賀県（唐津市・伊万里市・武雄市・嬉野市・有田町）、長崎県（佐世保市・平戸市・波佐見町）	日本磁器のふるさと　肥前　～百花繚乱のやきもの散歩～
	◎淡路市・洲本市・南あわじ市	『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～
2 事業による日本遺産の取組の活性化	◎和歌山県（新宮市・那智勝浦町・太地町・串本町）	鯨とともに生きる
	◎富山県（高岡市）	加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡－人、技、心－
	◎宮城県（仙台市、塩竈市、多賀城市、松島町）	政宗が育んだ“伊達”な文化
3 構成文化財の効果的な事業活用	◎大山町、伯耆町、江府町、米子市	地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市

＃037・ 平成28年度認定

日本磁器のふるさと　肥前　～百花繚乱のやきもの散歩～

申請者：◎**佐賀県（唐津市・伊万里市・武雄市・嬉野市・有田町）、長崎県（佐世保市・平戸市・波佐見町）**

ストーリー概要

陶石、燃料（山）、水（川）など窯業を営む条件が揃う自然豊かな九州北西部の地「肥前」で、陶器生産の技を活かし誕生した日本磁器。肥前の各産地では、互いに切磋琢磨しながら、個性際立つ独自の華を開かせていった。その製品は全国に流通し、我が国の暮らしの中に磁器を浸透させるとともに、海外からも賞賛された。

今でも、その技術を受け継ぎ特色あるやきものが生み出される「肥前」。青空に向かってそびえる窯元の煙突やトンバイ塀は脈々と続く窯業の営みを物語る。この地は、歴史と伝統が培った技と美、景観を五感で感じることのできる磁器のふるさとである。

将来像（ビジョン）

肥前窯業圏をストーリーで感じてもらえるよう、窯元のほか観光業・飲食業などの民間事業者がそれぞれの役割に応じて魅力・伝統などを発信していく。また、民間事業者と協議会による協働での取組を通して、来訪者が繰り返し肥前窯業圏を訪れ交流人口が増えていくことで、民間事業者だけでなく地域住民などにも波及効果が生まれていくようなサイクルが生まれる地域を目指す。さらに、肥前窯業圏の魅力や伝統が地域住民の誇りや愛着となるよう、適切に保存・活用・継承していく。

そのために、地域住民の誇り醸成、魅力を感じる場づくり（受入体制の強化）、日本遺産と観光を結び付けた情報発信と広域的な観光振興、推進体制の強化などに取り組む。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■有田内山伝統的建造物群保存地区
有田の磁器生産の中心地であった内山地区に立ち並ぶ窯元ややきもの商家。近代には洋風建築も加わった。

■やきもの市（有田陶器市など）
肥前窯業の各産地（唐津・伊万里・武雄・嬉野・有田・佐世保・波佐見）で行われるやきもの市。

■肥前波佐見陶磁器窯跡（畑ノ原窯跡）
16世紀末から近代にかけて操業した窯跡。世界最大級の巨大な登り窯は、磁器の大量生産を可能とした。

（5）観光事業化：事例1

ストーリーを体現する商品・事業の開発

事例サマリー

- ストーリーを担う新規事業の立ち上げに向けた公募事業を実施し、日本遺産ストーリーを体現する観光商品等の開発を促進。一部事業では地域の主導で自走化している。
- これまで独自に取り組んでいた事業が、日本遺産を契機に連携を開始。協同での展示会開催や、ワークショップでの相互紹介等が行われるなど新たな取組のきっかけにつながっている。

観光事業化における取組内容

＜概要＞

- 企業・団体の商品開発に対し公募を実施し、補助金を交付することで日本遺産ストーリー関連の商品開発を促進。補助を受けた商品は地域主導でコンテンツの自走化にもつながっている。
- また、日本遺産を契機に８市町で独立していたやきもの文化の相互連携を図ることができ、ワークショップを通じた連携などにつながっている。
- 事業を通じて、旅行商品や体験型コンテンツ、タンブラー、展示会などの商品を開発しており、ツアーにおいては、日本遺産肥前窯業圏の魅力を伝える観光事業・商品販売事業として自走している事業もある。

▼ 公募事業内容

実施年度	平成30年度～令和4年度
事業名	「肥前やきもの圏企画提案事業」など
概要	「窯業」や「やきもの（陶磁器）」をはじめとする圏域内の地域資源を活用した新しい取組に挑戦したい人を応援する仕組み
交付対象	対象経費の1/2～10/10以内
上限金額	上限50～200万円
募集件数	5～16件
選定軸	広域性、新規性、継続性

取組の背景・経緯

＜背景・経緯＞

- 市町や観光協会、窯元組合は日本遺産認定前から、やきもの文化を支援しており、事業者とは定期的な意見交換を行えていた。
- 日本遺産の認定を契機に、ストーリーを担う事業者らから、取り組んでみたい事業をヒアリングし、新規事業のニーズがあることから、公募型の新規事業支援事業を展開
- これまで３か年でのべ44社・団体に支援を実施した。

取組における工夫点

＜Point①：企業の商品開発を促進する仕組みづくり＞

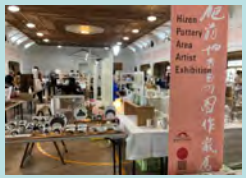
- 事前のコミュニケーションにより、事業者の観光商品開発ニーズを把握。
- 事業者の「やってみたい」を支援することにより、事業者が自発的に事業に取り組むことにつながった。
- また、公募型事業の実施により、事業者とのリレーション拡大につながり、日本遺産ストーリーの発信に向けた連携をとることができている。
- また、他の周遊事業とも連携を図ることで、複合的な日本遺産の情報発信や、周遊プランの充実化につながっている。

＜Point②：日本遺産を契機とした8市町の連携による事業実施＞

- 従来より、唐津焼、伊万里焼、有田焼などそれぞれの産地で焼き物をPRしていたが、日本遺産認定を契機に連携を図り、相互のプレゼンス向上に寄与している。
- 例えば、ワークショップの開催時には、他のやきもの作家を招聘し、やきもの紹介を行うなどして、受講者の興味を引き立たせていたり、共同で展示会を開催するなどして連携を深めている。
- また、公募事業と別に産地の特徴や技法を表現したやきものミニチュアのガチャ「窯ガチャ」事業を行い、各産地の窯元が協力して製作し、協議会の収益になっている。

＜肥前やきもの圏企画提案事業の主な成果＞

▼ 肥前やきもの圏作家展



▼ 肥前トラベリングタンブラー

出典https://www.arita.jp/news/4248.html

Instagram等でも＃付きで頻繁に投稿されている

問い合わせ先

■「肥前窯業圏」活性化推進協議会
事務局：佐賀県　文化・観光局　文化課　TEL：0952-25-7236　Mail:culture_art@pref.saga.lg.jp
長崎県　県北振興局　商工観光課　TEL:0956-24-5287

＃030・ 平成28年度認定

『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」
～古代国家を支えた海人の営み～

申請者： ◎**淡路市・洲本市・南あわじ市**

ストーリー概要

『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」の中で最初に生まれる特別な島として描かれた淡路島。その背景には、古代国家形成期に重要な役割を果たした“海人”とよばれる海の民が深く関わっていました。その歴史は弥生時代の先端技術である金属器文化をもたらし、古墳時代には塩や海産物の生産に携わるとともに巧みな航海術を駆使してヤマト王権を支え、奈良時代には海人が生産する塩や海産物が献上され、天皇の食膳を司る「御食国」としての島の姿を形づくりました。この“海人”とよばれた海の民の足跡は、貴重な遺跡や出土品をはじめ、多くの万葉歌人に詠まれた美しい景勝地、そして島内各所で味わうことのできる豊かな食材にみることができます。

将来像（ビジョン）

淡路島は、古来「国生みの島」「御食国」と呼ばれ、伊弉諾神宮や松帆銅鐸、五斗長垣内遺跡、淡路人形浄瑠璃等に代表される歴史遺産やストーリーのほか、都市近郊の「島」という立地特性、さらには鳴門海峡の渦潮や成ケ島など多くの資源・魅力に恵まれている。日本遺産ストーリーの中心に位置する“海人”の調査研究を通して明らかになる「島」ならではの歴史文化や風土に魅力を感じる美しく魅力ある観光の島、誇りと愛着を持って住み続けることができる島、そして都市が抱える諸問題から解放され、安全安心で心豊かに暮らせる島として、アフターコロナ社会における誰もが訪れたい・住みたいと思うスマートシティ“スマー島”を目指す。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■伊弉諾神宮
日本最古の神社とされており、伊弉諾尊・伊弉冉尊を御祭神とする神宮。

■洲本市立淡路文化史料館
淡路島の考古・歴史資料や美術工芸品を展示。構成文化財である慶野銅鐸等が展示されている。

■南あわじ市滝川記念美術館　玉青館
構成文化財である松帆銅鐸が展示されている。弥生時代を再現したVR体験ができる施設。

（5）観光事業化：事例2

ストーリーを体現する商品・事業の開発

事例サマリー

- 日本遺産認定を契機に、地道な島内における普及活動のみならず、新たな取組として日本初となる地方創生RPGゲームを制作することで、高い注目度を集め、島内外へのストーリーの啓発に寄与。
- ゲームコンテンツの活用により、普及・啓発から誘客につなげるための取組に発展。

観光事業化における取組内容

＜概要＞

- 日本遺産をテーマとしたスマホRPGを制作することで、ゲームを通じた島内外へのストーリーの発信のみならず、島内の店舗で活用可能なクーポン配布や、実際の観光地を訪れることで、ゲーム内で使用できるアイテムの配布等により、観光客の周遊促進を展開。
- 加えて、ゲーム内課金によって得た収益を委員会運営費の財源として確保。
- そのほかにも、基本的なストーリーの普及にも着実に取り組んでおり、島民への日本遺産ストーリーを普及させる取組を充実させ、ふるさと意識の醸成を図っている。
  - 教職員向けの研修を実施。
  - 小中高生に向けた教材の開発。
  - 島民に向けたシンポジウムの開催及び、全戸へのタブロイド紙の新聞折り込み。

- 名称：淡路島日本遺産RPG「はじまりの島」
- 概要：淡路島日本遺産委員会において制作し、淡路島観光協会において運営している。淡路島を舞台にしたロールプレイングゲームで、スマートフォン等でプレー可能。
- ストーリー：淡路島に住む普通の高校生が、イザナギに導かれ、淡路島の歴史を歪めてしまおうとする魔物に立ち向かい、淡路島を救うといった王道＆感動のRPG。
- R4.4には第二作目「はじまりの島～日本創世譚～」をリリースしている。

取組の背景・経緯

＜背景・経緯＞

- 委員会構成員より、「地方創生ゲームを作ろう」という発言に端を発する。
- 制作を進めるにあたり、多数のメディアの注目を受け、取材を受けたことをきっかけにDL数も初年度から２万件を突破。
- 同様にゲーム制作に取り組む自治体(宮城県石巻市：キズナファンタジア)等とも連携を図ることによって、ゲームファンの相互送客にもつながっている。
- 現在は、さらなるDLの増加に向け、本来の古事記伝の深堀と、RPGゲームへの反映を目指しストーリーとゲームの磨き上げに取り組んでいる。

取組における工夫点

＜Point①：日本遺産認定を契機に新たな取り組みの推進による注目度の獲得＞

- 日本遺産に認定されたことを契機に、RPGゲームの開発に着手。地方創生ゲームとして注目を集めたことで多数のメディアに取り上げられ普及に寄与した。

＜Point②：ゲームコンテンツの活用による地方創生への多様なアプローチの実現＞

- ゲームというコンテンツは、日本遺産ストーリーを発信していくのみならず、多様なアプローチによって地方創生に貢献している。
- 具体的には地方創生ゲームの製作によるメディアの注目、ゲームのDL及びプレーによる日本遺産ストーリーの理解と地域への関心創出、実際の観光地と紐づけと、クーポンの配布による地域への誘客及び消費喚起、その他の施策におけるキャラクターの活用、他市同事例のゲームとの連携による相互送客等、幅広い効果を生み出している。

問い合わせ先

■ 淡路島日本遺産委員会（一般社団法人淡路島観光協会内）　TEL：0799-22-0742

＃032・平成28年度認定

鯨とともに生きる

申請者：**和歌山県（新宮市・那智勝浦町・太地町・串本町）**

ストーリー概要

鯨は、日本人にとって信仰の対象となる特別な存在であった。人々は、大海原を悠然と泳ぐ巨体を畏れたものの、時折浜辺に打ち上げられた鯨を食料や道具の素材などに利用していたが、やがて生活を安定させるため、捕鯨に乗り出した。

熊野灘沿岸地域では、江戸時代に入り、熊野水軍の流れを汲む人々が捕鯨の技術や流通方法を確立し、これ以降、この地域は鯨に感謝しつつ捕鯨とともに生きてきた。当時の捕鯨の面影を残す旧跡が町中や周辺に点在し、鯨にまつわる祭りや伝統芸能、食文化が今も受け継がれている。

将来像（ビジョン）

日本遺産「鯨とともに生きる」の舞台、紀伊半島の南東部、熊野灘沿岸地域では、江戸時代初期に組織的な捕鯨が始まり、現在でも捕鯨が受け継がれています。地域には鯨と人の長い関わりを示す史跡が残り、鯨にまつわる様々な祭りや伝統芸能、食文化が受け継がれている地域である。

高齢化による人口減少が懸念される過疎化が進む地域であり、今後も「日本遺産」のブランドを活用し、交流人口を増加させることが地域活性化には極めて重要である。

県施策、町施策と連携し、誘客促進、周遊の促進を図り、本地域を訪問していただいた人達に対して、鯨とともに生活を行い、地域に根付いている文化・食事に触れる機会を増やすことで、地域における文化の保存・活用・伝承に繋げていく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■太地のくじら踊

綾棒を銛に見立てて打ち振る「綾踊り」と、鯨をつかみ取る「魚踊り」がある。和歌山県無形民俗文化財。

■飛鳥神社

捕鯨にまつわる伝統行事が受け継がれる。豪華な本殿は太地町文化財。

■鯨山見跡

三輪崎の鯨方が鯨を見張った場所。世界遺産・高野坂を少し外れた枝道の先にある

（5）観光事業化：事例3

事業による日本遺産の取組の活性化

事例サマリー

- 和歌山県観光振興課がリーダーシップをとり、各地域が連携して、周遊ルートやツアーの開発、ウォークツアーの実施、また今後はサイクリングによるルート開発など、周遊を促す工夫を行っている。
- 体験型コンテンツ（食・アクティビティ）を積極的に開発し、滞在時間の延長、消費拡大を図っている。

観光事業化における取組内容

＜概要＞

- ”海の日本遺産”と”山の世界遺産”をテーマとした1泊2日コースや、那智勝浦町～太地町プラン、串本町プラン、新宮市プランの４ルートを構築。新宮市観光協会、太地町役場産業建設課、南紀串本観光協会で、日本遺産「鯨とともに生きる」ウォークツアーを通年実施。
- 鯨肉を活用した新たなランチを開発する店舗を支援し、計10商品を開発。パンフレット「くじらキッチン」にて紹介。
- 鯨類を見学できる海上遊歩道、SUPやシーカヤック、食文化ミュージアムなど、体験コンテンツを充実化。モデルルートや体験コンテンツは、HPや総合ガイドブック、「Kumanonada とことん体験Book」などで発信。

＜参考＞

左）体験コンテンツを紹介した「Kumanonada とことん体験Book」
右）鯨肉を活用した飲食店を掲載したパンフレット

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 和歌山県では今後「弘法大師空海御誕生1250 年」「大阪・関西万博」などの観光イベントが目白押しであり、この期間を「ダイヤモンドイヤー」として位置づけ、それらと連携し、日本遺産プロモーションを展開することで、長期滞在、広域周遊に繋げる。

＜経緯＞

平成28・29年度　総合ガイドブックの配置
平成29年度　周遊モデルプランの構築
平成29年度　道の駅たいじの開業
令和元年度　Kumanonada とことん体験Book
平成30・令和2年度　「くじらキッチン」の開発支援
令和2年度　森浦湾海上遊歩道・体験コンテンツの開始
令和4年度　総合ガイドブックの更新、「Kumanonada くじらお食事マップ」
令和5年度　「Kumanonada とことん体験Book」更新予定

総合ガイドブック

取組における工夫点

＜Point①：県観光課の主導による周遊ルートやツアーの造成＞

- 和歌山県観光振興課がリーダーシップをとり、観光事業化を行っているため、地域を超えたプランが作りやすい環境にある。
- 同エリアには世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」もあり、和歌山県観光振興課の担当も重なっているため、連携した企画を立てやすい。また、南紀熊野ジオパークも位置しており、相乗効果で地域内の周遊促進を図っている。

＜Point②：地元企業と連携した食体験の発信＞

- 日本遺産の体験コンテンツとして、食（鯨肉）体験を重視している。平成30～令和2年度にランチ開発支援を行った。
- その時のフィードバックや周囲の意見を反映し、現在、ランチだけはなく、鯨肉が食べられる地元の居酒屋や食堂などを紹介するパンフレット「Kumanonada くじらお食事マップ」を作成した。（22店舗掲載）

＜Point③：継続的な情報の発信と更新＞

- 認定時に総合ガイドブックが制作されたが、今年度、情報を更新した新しい総合ガイドブックを制作。また、今後「Kumanonada とことん体験Book」や鯨食のパンフレットも更新を予定しており、HPとも連携して、常に新しい情報を発信している。

問い合わせ先

■ 熊野灘捕鯨文化継承協議会（事務局：和歌山県観光振興課内）　〒640-8585　和歌山市小松原通1-1　ＴＥＬ 073-441-2424

＃003・平成27年度認定

加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡 －人、技、心－

申請者：**富山県（高岡市）**

ストーリー概要

高岡は商工業で発展し、町民によって文化が興り受け継がれてきた都市である。高岡城が廃城となり、繁栄が危ぶまれたところで加賀藩は商工本位の町への転換政策を実施し、浮足立つ町民に活を入れた。鋳物や漆工などの独自生産力を高める一方、穀倉地帯を控え、米などの物資を運ぶ良港を持ち、米や綿、肥料などの取引拠点として高岡は「加賀藩の台所」と呼ばれる程の隆盛を極める。町民は、固有の祭礼など、地域にその富を還元し、町民自身が担う文化を形成した。純然たる町民の町として発展し続け、現在でも町割り、街道筋、町並み、生業や伝統行事などに、高岡町民の歩みが色濃く残されている。

将来像（ビジョン）

前田家関連の文化資産は、高岡の歴史資源の大宗をなすものである。町民により文化が形成され、発展し続けてきた姿は、町割り・街道筋や町並み・伝統行事、さらにはものづくりの技などに今でも色濃く残されている。日本遺産を通じて開町400年を経て新たな100年の道筋とする取組みとして、観光・地域振興等にも結び付け、歴史都市高岡のブランド化の確立を図る。従来注目されてこなかった歴史的な価値に目を向け、文化財を活かした新たな取組みを進めながら伝統文化の保存・継承と新たな文化の創造を目指す。この目標を達成するため、まちを「磨き」、魅力を「つなぎ」、未来を「創る」をキーワードに新たなまちを市民と地域、行政がともに創りあげていく「市民創造都市高岡の実現」を目指す

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■高岡御車山祭の御車山行事／重要無形民俗文化財

金工、漆工など高岡の工芸技術を集めた装飾が施された山車が市内を巡行する祭。町ごとに競い合い、豪華になった姿は町民たちの心意気の象徴。

■瑞龍寺／国宝・重要文化財（建造物）

高岡開町の祖前田利長の菩提を弔うために建てられた曹洞宗寺院。高岡の町民に長く利長の遺徳をしのばせ、町の繁栄を授ける意図をされた。

■金屋町重要伝統的建造物群保存地区

高岡開町に際し前田利長が鋳物師を招き、鋳物づくりを行わせたことに始まる鋳物師町。高岡鋳物の一大生産地として発展した。

（5）観光事業化：事例4

事業による日本遺産の取組の活性化

事例サマリー

- 日本遺産ストーリーに関連する「ものづくりの町」「工芸都市高岡」というブランドを活用し、そこに親和性が高いターゲットを設定し、様々な取組を行っている。
- 地域連携DMO（一社）富山県西部観光社 水と匠が、地域プロデューサーの役割を持ち、自立して活動しながら、ツアーやイベントの造成や伝統工芸の商品の開発・販売などを行っている。
- 住民組織であるNPO法人や伝統産業青年会等の積極的関与による自立・自発的な観光事業の整備が行われている。

観光事業化における取組内容

＜概要（取組の一例）＞

- 協議会、DMO、高岡伝統産業青年会らが連携し、「高岡の職人になる！体験型誘客事業」を実施。高岡の工房・工場が観光客を受入れ、仕事体験をしてもらいながら交流を行う旅行商品を造成。10か所の工房・工場が現在も登録されており、現在も自走しながら継続している。また工芸体験や、見学ができる工場・工房の情報も発信。
- 構成文化財である重要伝統的建造物群保存地区・金屋町において、住民組織のNPO法人が古民家を改装してゲストハウスを整備したり、空き家をマッチングする活動を行う。認定後６年間で、重伝建エリアに飲食店や小売店が17軒、宿泊施設が２軒開業。
- 日本遺産推進協議会とDMO、地元のまちづくりNPOとが協力し、日本遺産ストーリーや構成文化財を周遊するモデルコースを案内するパンフレット（タブロイド紙）を作成。また、文化創造都市高岡のPRや魅力発信の目的において、ロゴマークやイラストキャラクターなどの各種素材データが無償で利用できる取組も開始。

左から「高岡の職人になる！体験型誘客事業」HP／重伝建地区のゲストハウス／タブロイド紙／無償提供されているイラスト素材

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 高岡市はものづくりの町として発展してきたが、製造業の低迷に危機感を抱き、早くから産業観光に取り組んでいた。日本遺産の認定を受けて「ものづくりの町」「工芸都市高岡」に歴史的背景、ストーリーが加わり、より付加価値の高いサービス・商品の造成につながった。

取組における工夫点

＜Point：民間主導の取組推進＞

- 日本遺産ストーリーにも「高岡は町民によって文化が興り受け継がれてきた」とあるように、日本遺産関連においても、多くの事業が地域の民間団体、民間事業者によって主体的に行われている。
- 特に、民間発のDMOである「（一社）富山県西部観光社　水と匠」が地域プロデューサーの役割を担い、日本遺産関連事業のリーダーシップをとっている。また、収益部門である「株式会社　水と匠」も設立し、自立した事業展開も行っている。DMO水と匠は大手飲料会社に事務局をおき、マーケティング調査やブランディングに基づいた商品・サービスの造成を行っている。
- DMOの他、重伝建地区金屋町のNPO法人である金屋町元気プロジェクト、伝統産業業界の後継者・若手従事者からなる高岡伝統産業青年会、富山大学芸術文化学部、構成文化財の寺院などが日本遺産協議会と連携し、様々な事業を展開している。

問い合わせ先

■ 高岡市教育委員会文化財保護活用課　TEL:0766-20-1453　FAX:0766-20-1667

＃019・平成28年度認定

政宗が育んだ“伊達”な文化

申請者：**宮城県（仙台市、塩竈市、多賀城市、松島町）**

ストーリー概要

仙台藩を築いた伊達政宗は、戦国大名として政治・軍事面での活躍は広く知られるところであるが、時代を代表する文化人でもあり、文化的にも上方に負けない気概で、自らの“ 都” 仙台を創りあげようとした。政宗は、その気概をもって、古代以来東北の地に根付いてきた文化の再興・再生を目指す中で、伊達家で育まれた伝統的な文化を土台に、上方の桃山文化の影響を受けた豪華絢爛、政宗の個性ともいうべき意表を突く粋な斬新さ、さらには海外の文化に触発された国際性、といった時代の息吹を汲み取りながら、これまでにない新しい“伊達”な文化を仙台の地に華開かせていった。そして、その文化は政宗だけに留まらず、時代を重ねるにつれ後の藩主に、さらには仙台から全国へ、そして武士から庶民にまで、さまざまな方面へ広がり、定着し、熟成を加えていった。

将来像（ビジョン）

（将来像）“DATE”といえば、世界はみやぎの日本遺産だと分かる、世界に誇れる歴史文化の豊かな地域を目指す

【１】世界に発信を行うことで、伊達な文化が“DATE”として宮城・仙台を指す国際的な言葉となり、訪れる旅行客には開かれた地域として、伊達な文化が感動できる仕組み・体制になっている。

【２】幅広く構成文化財や地域に人が訪れ伝統工芸品等地場産業の持続、飲食・宿泊施設の増加など裾野が拡大し地域全体に恩恵が行き渡る。

【３】地域住民が誇りと愛着をもち、観光地としてのホスピタリティと、文化財保護意識の向上、社会貢献活動に繋がっている。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■特別名勝　松島

仙台藩が庇護した和歌の歌枕・仏教の勝地

■国宝　瑞巌寺

伊達政宗が再興した鎌倉時代からの古刹

■重要文化財　鹽竈神社

仙台藩歴代藩主が大神主をつとめた東北全体の守神

（5）観光事業化：事例5

事業による日本遺産の取組の活性化、ストーリーを体現する商品・事業の開発

事例サマリー

- ガイド養成講座修了者からなるステップアップ講座で日本遺産ストーリーを体験するモデルルート造成。
- 地域プロデューサーと連携し、地場の民間企業に対し日本遺産ストーリーをパッケージに用いた商品開発を事務局がサポート、4社で商品リリースに繋がり、民間の販路を活かした域外へのPRに繋げた。
- 構成団体である宮城県観光連盟が作成する教育旅行ガイドブックで日本遺産周遊を特集化、県の観光科の高校生が域外の高校生にガイドを行う教育旅行メニューを掲載。

観光事業化における取組内容

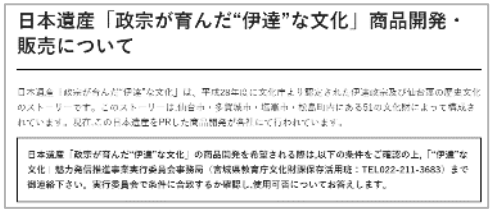
＜概要＞

- 日本遺産ストーリーガイド養成講座の一環として、ガイドがモデルルート作成と現地での検証を行い、その成果を各ガイド団体へ共有。モデルルートは法人パートナー（金融機関）の店舗モニターを通じて発信したほか、リーフレット（日・英語版）にまとめた。
- 地域プロデューサーと連携し、観光事業者以外の地場民間企業に対し、日本遺産のストーリーが入った商品開発を事務局（県の文化財課が中心）がサポート。令和元年以降、４社にて日本遺産ストーリーとQRコードがパッケージに入った商品をリリース。協業した企業の持つ道の駅や全国の大手小売店等の販路を通じて、域内外へのPRに繋がった。
- 教育旅行の目的として日本遺産周遊を訴求するため、教育旅行ガイドブックで日本遺産特集を展開。地元の高校と連携して、高校生によるガイド対応プランを掲載した。

＜参考＞

▼教育旅行ガイドブックに掲載されたプラン

▼宮城県のHPに記載された商品開発にあたってのルール



日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」商品開発・販売について

日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」は、平成28年度に文化庁より認定された伊達政宗及び仙台藩の歴史文化のストーリーです。このストーリーは仙台市・多賀城市・塩釜市・松島町内にある51の文化財によって構成されています。現在、この日本遺産をPRした商品開発が発行にて行われています。

日本遺産「政宗が育んだ“伊達”な文化」の商品開発を希望される際は、以下の条件をご確認の上、「“伊達”な文化」魅力発信推進事業実行委員会事務局（宮城県教育庁文化財課保存活用班：TEL022-211-3683）までご連絡下さい。実行委員会で条件に合致するか確認し、使用可否についてお答えします。

出典：https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/bunkazai/japanheritage02.html

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 平成30・31年と構成市町・民間企業、ガイド団体でコアコンセプト確立研修会やビジネスモデル構築研修会を実施。関係者でどう日本遺産事業に取り組んでいくか議論を重ね、地域プロデューサー・地域プレイヤーと進むべき方向性の目線を揃えてきた。

＜経緯＞

- 平成28年～　日本遺産ストーリーガイド養成講座・ステップアップ講座の実施。
- 令和元年～　事務局による商品開発のルール整備・商品開発サポートの開始。
- 令和2年～　松島町の構成文化財にてオリジナルグッズの販売開始。

取組における工夫点

＜Point①：ガイド養成講座を活用したモデルルートの作成＞

- 26のガイド団体が参加するガイド養成講座修了者が参加するステップアップ講座にて、「ガイドが薦めるモデルルート」作成を実施。また、このモデルルートを踏まえ、各旅行会社が日本遺産周遊ツアー造成を行った。その後の波及効果では、DMOが伊達政宗と係わる認定地域の日本酒文化と観光名所と合わせた体験観光コンテンツにもつながっている。

＜Point②：商品開発におけるルール整備＞

- 案件毎に、自治体の立場で、営利企業にどの程度の介在するかは悩ましいポイントであることから、先んじて、構成自治体で議論の上、ルールを明文化し県のHPに掲載。商品開発にあたっては、可能な限り、ストーリーを入れることとQRコードによる詳細の情報告知を入れるようにしている。その他、松島町で行った構成文化財の保護と観光事業化への収益寄与を目的にしたオリジナルグッズ販売について、他構成市町でも横展開できるよう、実行委員会で、ルール・フロー整備にも取り組んでいる。
- 県の広報課で実施している出前講座の一環として、民間企業での社員向けプログラムも行い、温泉旅館や土産販売店でも日本遺産のストーリーを対面で伝えていけるよう、取組を行っている。

＜Point③：地元の高校生との連携＞

- 地域プロデューサーと松島町がサポートに入り、県立松島高校観光科と連携。高校生が観光ボランティアガイドとして、日本遺産ストーリーと松島町の歴史・文化を・SDGsに沿って同じ高校生に対話的に案内するプランを教育旅行誘致のガイドブックに掲載した。

問い合わせ先

■ 協議会：「“伊達”な文化」魅力発信推進事業実行委員会
■ 事務局：宮城県教育庁文化財課保存活用班　（電話：０２２－２１１－３６８３　メール：bunzaih@pref.miyagi.lg.jp）

＃033・ 平成28年度認定

地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市

申請者： ◎**大山町、伯耆町、江府町、米子市**

ストーリー概要

大山の山頂に現れた万物を救う地蔵菩薩への信仰は平安時代以降に牛馬信仰を育み、牛馬のご加護を願う人々をも大山寺に集めた。ここで行われるようになった牛馬の市は信仰に裏打ちされて盛んになり、明治時代には日本最大の牛馬市へと発展した。大山寺へ続く大山道沿いは西国諸国からの参拝者や商人などの往来で賑わった。今も大山道沿いには往時を偲ぶ景観・文化が伝わり、地域の人々が「大山さんのおかげ」と感謝の念を捧げながら大山を仰ぎ見る暮らしが息づいている。

将来像（ビジョン）

大山の恵み豊かな地（天恵の地）であることを再認識し、地域活性化への取組を進めることにより地域への誇りを醸成し、地域資源保護・地域経済活動の担い手の育成しながら、次のような地域を目指す。
・国内外から多くの観光客が訪れ、「また来たい」「ここに住みたい」と思われる地域
・圏域の人々が「大山さんのおかげ」を常に意識することができ、地域に誇りを持って生活している地域
・地域の魅力が増すことで経済が好循環し、関係人口の増加により持続可能な状態となった地域

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■大山寺本堂
地蔵菩薩を祀る。現在の地蔵信仰の中心をなす堂宇。

■大神山神社奥宮の石畳道
大山寺本社の大智明権現社へ向かう700mの参道。日本一長いといわれている。

■旧加茂川の地蔵
子供の供養のために祠堂を建てたことが始まりとされ、地蔵信仰が大山の裾野まで行き渡っていたことを物語る。

（5）観光事業化：事例6

構成文化財の効果的な事業活用

事例サマリー

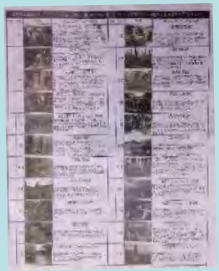
- スポーツの競技特性＝ロゲイニングの特性を、点在する構成文化財に重ね合わせ、来訪×周遊×拡散の要素を織り込んだ周遊コンテンツを創出。
- チェックポイント・ルート設定による周遊ルート多様化により、リピート化・参加者層の拡大を追求。

観光事業化における取組内容

＜概要＞

- 日本遺産ストーリーの根幹を担い、地域に点在する地蔵を活かした、周遊コンテンツである「写真で地蔵ロゲイニングin大山寺」を開催。
- フォトロゲイニングにより、スポーツをしながら構成文化財を周遊するという新たな楽しみ方を提案。
- 時間内に好きな順番でなるべく多くのチェックポイント＝構成文化財である地蔵を周り、チェックポイントに到達した証として、予め提示されている写真と同じ風景を写真におさめることでポイント加算されるため、周遊と写真撮影が競技に内包されており、撮影された写真の拡散効果も副次的に想定。
- 大会毎のチェックポイントの追加変更により参加者は新たな発見が可能。チェックポイントには構成文化財のみならず地元飲食店や土産物店等を設定することで経済効果も狙う。集客には民間会社とも連携している。
- 毎回50名程度の参加者を集め、県外からの参加者が4割程度を占めている。

▼ フォトロゲイニング概要



- 名称：写真で地蔵ロゲイニングin大山寺
- 概要：大山を舞台に、構成文化財を含めたチェックポイントを設定・周遊するフォトロゲイニング大会を開催

取組の背景・経緯

＜背景・経緯＞

- 大山ツーリズム協議会の発案に端を発する。
- 本来なら車で通り過ぎてしまうような場所との偶然の出会いを演出し「観光のスピード」を変える、地元の人々が”こんな場所があったのか”と地元の新しい一面を知れる取組を模索する中、自分のペースで地域を回れるフォトロゲイニングの特性に着目。
- 大山ツーリズム協議会が主催となり、大山町観光課、一般社団法人大山観光局、地元ガイドクラブなどが連携することで実現・開催に至る。
- 開催の度にチェックポイントを追加・変更することで参加者の間口を広げるなど改善・進化に取り組み続けている。

取組における工夫点

＜Point①：スポーツの競技特性を活かした周遊型コンテンツの創出＞

- 日本遺産ストーリーの根幹を担い、地域に点在する地蔵の活用、大山を中心とした地形条件が活き、かつ周遊を与件とする競技への着目、情報拡散のきっかけとなる写真撮影を織り込み、日本遺産×周遊×拡散につながる周遊コンテンツを創出。

＜Point②：複数の周遊パターン設定を通じた発展・進化＞

- 複数パターンのコース設定を通じ、距離・所要時間による周遊ルートの多様性を持たせ、選択するコースを変えたリピート化と参加者層の拡大を目指している。

＜Point③：民間企業連携を通じた来訪促進＞

- 一般社団法人大山観光局ツアーデスクや民間バス会社と賞品の提供や誘客面で連携し、来訪促進・参加促進に貢献している。

問い合わせ先

■ 鳥取県西伯郡大山町末長500　大山町役場　観光課　電話　0859-53-3110　メール　kankou@town.daisen.lg.jp

(6)普及啓発

取組推進のポイント

- 地域内において日本遺産の認知・関心を高め、誇りに思えるようにするため、学校教育と連携した普及啓発や、地域住民への普及啓発等を行う。
- 啓発の際は担い手の育成やストーリーの継承に興味を持たせられるように工夫する。

	キーテーマ	構成市町村	ストーリー
1	認知度・関心度を高める普及啓発	◎長崎県（対馬市・壱岐市・五島市・新上五島町）	国境の島　壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～
2	ブランド認証を活用した一般及び地域住民への認知度・関心度を高める普及啓発	◎郡山市・猪苗代町	未来を拓いた「一本の水路」 －大久保利通“最期の夢”と開拓者の軌跡　郡山・猪苗代－
3	担い手の確保・ストーリーの継承につなげる普及啓発	◎福井県（小浜市、若狭町）	海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 －御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－

＃017・ 平成27年度認定

国境の島　壱岐・対馬・五島　～古代からの架け橋～

申請者：◎**長崎県（対馬市・壱岐市・五島市・新上五島町）**

ストーリー概要

日本本土と大陸の中間に位置することから、長崎県の島は、古代よりこれらを結ぶ海上交通の要衝であり、交易・交流の拠点でありました。特に朝鮮との関わりは深く、壱岐は弥生時代、海上交易で王都を築き、対馬は中世以降、朝鮮との貿易と外交実務を独占し、中継貿易の拠点や迎賓地として栄えました。その後、中継地の役割は希薄になりましたが、古代住居跡や城跡、庭園等は当時の興隆を物語り、焼酎や麺類等の特産品、民俗行事等にも交流の痕跡が窺えます。国境の島ならではの融和と衝突の歴史を繰り返しながらも、連綿と交流が続くこれらの島は、国と国、民と民の深い絆が感じられる稀有な地域であります。

将来像（ビジョン）

①壱岐、対馬、五島の特色ある歴史的文化的価値に加え、「融和と衝突を繰り返しながらも、連綿と続く大陸との交流と絆」という、一つのコンセプトでつながれた日本遺産のストーリーとしての新たな価値の発信
②住民の地域に対する誇り、民間主体の自発的な取組、地域プレーヤーの育成などにつながる「ふるさと教育」
③訪れた誰もが「国境の島がつむいだ2300年の悠久の歴史」を堪能できるための観光振興と、次代を担う若者や民間による国境を越えた友好交流

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■金田城跡（対馬市）
唐や新羅の日本進攻を防ぐ目的で築かれた朝鮮式山城跡。

■原の辻遺跡
弥生時代の環濠集落跡（海外交易拠点）で、『魏志倭人伝』に記された一支国の王都。

■三井楽(みみらくのしま)
遣唐使船の最終寄港地である、五島市三井楽町の海岸域及び海域。

（6）普及啓発：事例1

認知度・関心度を高める普及啓発

事例サマリー

- 学生にストーリーに興味を持ってもらう工夫として、従来副読本として配布していた「ふるさと長崎県」のWeb化を実施。そこへ日本遺産ストーリーを啓発するパートを追加した。
- さらに従来構成4市町で行っていた普及啓発活動を、出前講座として、長崎県本土の中学校へも展開し、本土からの往来の活性化につなげている。
- 一般の方々にストーリーに関心を持ってもらう工夫として、遺跡の発掘事業に取り組むことで、サブストーリーの発掘・磨き上げに取り組んだり、郷土愛を醸成するための郷土検定を行うなどしている。

普及啓発における取組内容

＜概要＞

- 日本遺産ストーリーを普及させていくための取組として、学校教育への展開のみならず、ストーリーの関心度を高めるための工夫にも取り組んでいる。
- 学校教育においては、従来配布していた副読本をWeb化し、日本遺産ストーリーの記事を追加するなどの取組を行い、小中学生の興味・関心を引いている。
- また、ストーリーに関心を持たせるための工夫・事業として、県の研究機関と連携し、遺跡発掘やシンポジウムの開催によるサブストーリーの磨き上げの取組を実施した。加えて郷土愛醸成を図るための、郷土検定を実施している。

▼各市町における特徴ある歴史資産を活かした普及啓発

- 名称：一支国博物館特別企画展「カラカミ遺跡の全貌」及び壱岐学講座「カラカミ遺跡の全貌」
- 概要：構成文化財の一つである「カラカミ遺跡」から発掘された約300点の展示に加え、市民向け講座を開催し、143人が参加。

※子供向けの普及啓発としては貴頭衣や装飾品を身に着け、一支国人になりきって当時の暮らしを学ぶ体験コンテンツも実施（ただし、現在は新型コロナ感染拡大防止のため見合わせ中）。

朝鮮通信使ゆかりのまち全国交流会対馬大会（座談会、フィールドワーク実施）

出前講座で国境の島のストーリーと文化財を学習（五島南高校）

中学校の総合学習で、最澄ゆかりの山王山の歴史などを体験

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 従来より、国境の島としての歴史と遺跡を有する特徴を生かし調査研究は行われていたが、日本遺産を契機に、さらなるストーリーの発信力強化に繋がっている。

取組における工夫点

＜Point①：中学生への普及啓発の取組の高度化＞

- 従来配布していた副読本「ふるさと長崎県」のWeb化に伴い、日本遺産ページを追加するなど、日本遺産を契機に取組の高度化を図っている。
- 加えて、それまで中学生を対象とした日本遺産ストーリーの普及啓発は構成4市町のみで展開していたが、本土への出前講座と題し、長崎県内の他市町の小中学生にも日本遺産ストーリーの普及授業を行い、本土からの往来の活性化につなげている。

＜Point②：ストーリーに関心を持たせるための工夫＞

- ストーリーの関心度向上に向けた工夫として、「島の遺跡魅力探究事業」（原の辻遺跡調査研究事業）等で遺跡の発掘調査を実施し、サブストーリーづくりに活かしている。
- また、郷土愛を深める工夫として五島市郷土検定を展開し、過去４回開催（新型コロナウイルスの影響で令和2年度は中止）し、100名以上が受験。観光ガイドの増加にもつながっている。

▼「島の遺跡魅力探求事業」

- 名称：「島の遺跡魅力探求事業」
- 概要：壱岐市原の辻遺跡に加え対馬市や新五島町で遺跡の発掘調査。調査結果については、現地での発掘状況の説明会や、博物館での説明に加え、令和6年度には長崎県高校生遺跡フォーラムとして、高校生の討論会や研究者による講演を予定しており、サブストーリーの発掘につなげている。

問い合わせ先

■ 日本遺産「国境の島」推進協議会（長崎県文化振興・世界遺産課内）　TEL（095）895-2762

＃022・平成２８年度認定

未来を拓いた「一本の水路」
－大久保利通“最期の夢”と開拓者の軌跡　郡山・猪苗代－

申請者：**郡山市・猪苗代町**

ストーリー概要

明治維新後、武士の救済と、新産業による近代化を進めるため、安積地方の開拓に並々ならぬ想いを抱いていた大久保利通。夢半ばで倒れた彼の想いは、郡山から西の天空にある猪苗代湖より水を引く「安積開拓・安積疏水開さく事業」で実現した。奥羽山脈を突き抜ける「一本の水路」は、外国の最新技術の導入、そして、この地域と全国から人、モノ、技を結集し、苦難を乗り越え完成した。この事業は、猪苗代湖の水を治め、米や鯉など食文化を一層豊かにし、さらには水力発電による紡績等の新たな産業の発展をもたらした。未来を拓いた「一本の水路」は、多様性と調和し共生する風土と、開拓者の未来を想う心、その想いが込められた桜とともに、今なおこの地に受け継がれている。

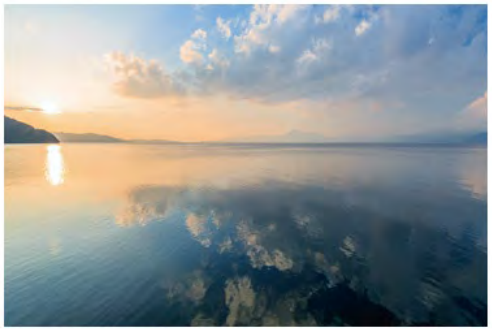
将来像（ビジョン）

観光資源を用いた「稼げる」事業展開を推進し、観光客数の増加につなげる。
協議会がベースとなり、地域住民や民間企業の普及啓発等の取組を支援して地域内外の関係者を取り込むことでネットワーク化を図り、地域全体で来訪者の受け皿を構成する。
協議会の組織体制について見直しを行い、民間を主導とする自立・自走に向けた改編を段階的に実施することにより、認定ストーリーを通じた持続的な地域活性化推進の実現を目指す。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■猪苗代湖

猪苗代湖の水の恩恵を受けるべく、安積開拓・安積疏水開さく事業が行われた。



■旧福島県尋常中学校本館(安積歴史博物館)

開拓による発展等によりこの地に設置された明治期の代表的な洋風建築の建物である。

■開成山公園

開拓を進めた開成社が作った池や、同社の植樹により生まれた桜の名所があり、郡山のシンボル的場所である。

（6）普及啓発：事例2

ブランド認証を活用した一般及び地域住民への認知度・関心度を高める普及啓発

事例サマリー

- ブランド認証は「一本の水路」に関連した産品の他、多彩な活動を行っている団体活動も対象となる。様々な業種の団体・個人が集まっているのがブランド認証団体の特色であり、つながることでこれまでなかった新たな企画、活動が生まれている。
- 一本の水路ブランド認証団体交流会では、主体性がある民間団体同士がつながり、自主的な活動や新しい取組が生まれている。

組織整備における取組内容

＜概要＞

- **一本の水路ブランド認証団体交流会の開催**

日本遺産ストーリーに深く関連付けられる「優れた商品」や「優れた取組を行っている団体」を、開拓者精神の象徴としてブランド認証している。
一本の水路ブランド認証を受けた団体間のネットワーク構築を目的として、交流会を開催した。互いの強みを理解し合うことで、主体的な活動や新しい価値の創造に結びついている。

「つながる灯！ユニバーサルガイド」
ボランティアガイド団体と介護事業所との連携事業として認知症の高齢者も楽しんでもらえるツアー

「安積野（あさかの）ろまん」
日本遺産ストーリーのパンフレット付きブランド認証産品の詰め合わせギフト

取組の背景・経緯

＜経緯＞

- 平成30、令和元年度　フロント担当者及びバス、タクシーのドライバーを対象とした研修会
- 令和元、２年度　　ブランド認証団体を対象としたセミナー、ボランティアガイド研修
- 令和４年度　　日本遺産に係る様々な立場の方を対象とした「一本の水路」セミナー

取組における工夫点

＜Point①：「産品」「活動」を対象にしたブランド認証＞

- ブランド認証は「一本の水路」に関連した産品の他、多彩な活動を行っている団体活動も対象となる。産品は農作物や加工品、飲食店メニュー、工芸品や工業製品も対象となっており、活動はまちづくりに取り組む事業者や地域団体、学校等の団体活動が対象である。
- 様々な業種の団体・個人が集まっているのがブランド認証団体の特色であり、つながることでこれまでなかった新たな企画、活動が生まれている。

＜Point②：交流会による創発できる場の形成＞

- ブランド認証に採択されることで、団体の意欲向上につながっている。一方で、それぞれの活動自体が知られていないため、日本遺産を活用し地域を盛り上げている取組をより多くの人に知ってもらうこと、団体間が交流できる機会を設けることを目的に令和元年に交流会を企画した。
- 交流会では、団体の方々の取組発表とともに、ブランド認証の活動展示を設けることで、参加者同士が交流し、新たな商品開発につながった。交流することが新たな機会や創発の場となることを実感した。
- そのため、これまではホテルフロント・タクシードライバー研修、ボランティアガイド研修、ブランド認証団体交流など、個別に開催していたが、令和4年度は合同セミナーという形で企画した（2月2日実施）。重点支援地域である「出羽三山」のオンライン講話の他、地域の方々による取組の紹介を行った。また、展示コーナーを設けることで、それぞれの団体間が交流し、活発に意見交換ができる場を創出した。

問い合わせ先

■ 日本遺産「一本の水路」プロモーション協議会
福島県郡山市朝日一丁目23番7号　郡山市国際政策課内
TEL：024-924-3711　FAX：024-924-0059　E-mail：gakuto@city.koriyama.lg.jp

＃005・平成27年度認定

海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群
－御食国（みけつくに）若狭と鯖街道－

申請者：**福井県（小浜市、若狭町）**

ストーリー概要

若狭は、古代から「御食国」として塩や海産物など豊富な食材を都に運び、都の食文化を支えてきた地である。また、大陸からつながる海の道と都へとつながる陸の道が結節する最大の拠点となった地であり、古代から続く往来の歴史の中で、街道沿いには港、城下町、宿場町が栄え、また往来によりもたらされた祭礼、芸能、仏教文化が街道沿いから農漁村にまで広く伝播し、独自の発展を遂げた。近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群沿いには、往時の賑わいを伝える町並みとともに、豊かな自然や、受け継がれてきた食や祭礼など様々な文化が今も息づいている。

将来像（ビジョン）

近年「鯖街道」と呼ばれるこの街道群が、単に鯖を運んだだけでなく、若狭から京都へ、京都から若狭へ様々な文化をもたらした交流の道であることが注目されている。特に、和食が大成した京都の食文化を形成してきた「御食国」の歴史は今も続いており、食文化と祈りの場である社寺、祈りの民俗行事、食材を育む自然を一体的に発信活用することにより、京都を中心とした京阪神地区の食の都、そして京都に訪れる多くの観光客が食の根幹を求めて訪れるストーリーや基盤を整え、交流人口の拡大と地域全体の活性化を図っていく。いにしえには、「京は遠ても十八里」と呼ばれた文化交流をもとに、北陸新幹線全線開業を目論み「京は遠ても十八分」というスタンスを打ち出し、京都郊外観光地として京都との一体化を図っていく。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■旧古河屋別邸・庭園／建造物（県指定）

江戸時代の回船問屋「古河屋」全盛の時代、文化12年（1815）に建築された建物並びに庭園。

■放生祭／無形民俗文化財

毎年9月第３土日に旧小浜地区24区のうち12区が伝統の神事芸能を八幡神社に演舞奉納する祭。

■熊川宿／国重伝建

若狭街道ルートの物流の中継拠点。軍事上、物流上の要衝として重要な役割を担った宿場町。

（6）普及啓発：事例3

認知度・関心度を高める普及啓発／担い手の確保・ストーリーの継承につなげる普及啓発

事例サマリー

- 座学だけでなく、実際に体験したり、地域の大人から学ぶ機会を設けることで、地域への愛着醸成も図っている。
- インプットだけでなく、アウトプットの機会創出を促進することで、地域での認知度向上にもつなげている。
- 民間事業者等の取組や協力・連携体制を活かして継続的な取組を積み重ねている。

普及啓発における取組内容

＜概要＞

- 子ども語り部テキストの配布・学習や、日本遺産ストーリーの根幹である鯖街道を事前学習し、実際に京都まで歩く取組（鯖街道チャレンジウォーク）を総合学習の時間を活用して実施している小学校の事前学習等の支援をしている。
- 地域サポーターを講師とした、構成文化財である伝統産業や食の技術の体験機会を創出している。
- 立命館大学食マネジメント学部と連携して、御食国の水産加工技術の到達点と言える「若狭小浜小鯛ささ漬」の歴史的価値を調査発信を実施している。また、外部の若者や専門家による地域の食文化に対する評価を地域住民に発信している。
- 鯖街道の日プロジェクト実施事業として、京都市から小浜市までの沿線自治体及び沿線を拠点とする民間事業者等と連携し、食文化の発信等を実施している。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 食育文化都市として、食のまちづくりに取り組む小浜市では、生涯食育事業と連動した事業展開が図られ、構成文化財の伝統産業（若狭塗・若狭和紙・へしこなれずしの技法・熊川葛製造）への体験参画が積極的に行われている。

＜経緯＞

- 小浜市の主要ガイダンス施設である「御食国若狭おばま食文化館」では、幼稚園・保育所から義務教育課程において、キッズキッチンやジュニアキッチンなど常時食育に関わる学習体制・機会を構築しており、その一貫として日本遺産の歴史や取組について学んでいる。
- 認定以後、小浜市内の新小学校４年生への子ども語り部ガイドブックの配布と学習活動を継続して実施しており、開始から6年以上が経過し、日本遺産に触れてきた高校生の研究事業にも成果が現れており、地域を担う人材の育成が進んでいる。
- 市内小学校の地域学習や総合学習では、テーマの多くが日本遺産のストーリーや構成文化財に関わるものとなっており、地域への愛着を育む素地となっている。

取組における工夫点

＜ Point①：実際に体験する機会や地域サポーターから学ぶ機会の創出・支援＞

- 鯖街道チャレンジウォークや伝統産業の体験等、様々な場面で地域サポーターの協力を得ながら、実際に日本遺産のストーリーを直接体験する機会を設けている。

＜ Point②：学びの成果を発表する機会、商品開発・販売する機会の促進＞

- 地元高校生の研究事業として継続的に取り組まれ、小浜よっぱらいサバを用いた鯖缶を開発した。研究当初から目指していた宇宙食にも採用され、令和3年度には一般向けに改良され販売が開始されている。
- 地元小学校でも地域学習や総合学習を契機に、地元料理人やデザイナーと連携して、令和3年度にも鯖を用いた商品が開発された。
- 鯖街道チャレンジウォークでは、学びの成果を鯖街道終点の京都での学習成果発表による発信機会も設けられた。
- 学校の活動が地域での認知度の向上にもつながっている。

＜ Point③：民間事業者等の取組の促進・支援・協力＞

- 体験ウォーキングや街道整備、スポーツツーリズムの支援・協力等によって民間事業者や市民の自主的な事業が活発化している。
- 民間事業者が主体となって実施する「鯖街道の日プロジェクト」のように、民間事業者だけでなく鯖街道沿線自治体等との連携・協力体制を活かすことで、沿線住民の鯖街道へのシビックプライド向上や、鯖街道を往来する意識啓発を図っている。

問い合わせ先

■ 小浜市・若狭町日本遺産活用推進協議会 事務局（小浜市産業部文化観光課）
電話：0770-64-6034　メール：rekishi@city.obama.lg.jp

(7)情報編集・発信

取組推進のポイント

- 日本遺産に認定されているストーリーに関連する基本的な情報について HP 、SNS等において情報発信を行う。
- Web上の情報収集から予約までの導線を整える。

	キーテーマ	構成市町村	ストーリー
1	ストーリーを伝えるための情報基盤整備・発信	◎淡路市・洲本市・南あわじ市	『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」 ～古代国家を支えた海人の営み～
2	スムーズな来訪につなげる仕組みの構築	◎長崎県（対馬市・壱岐市・五島市・新上五島町）	国境の島　壱岐・対馬・五島 ～古代からの架け橋～

＃030・ 平成28年度認定

『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～

申請者： ◎**淡路市・洲本市・南あわじ市**

ストーリー概要

『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」の中で最初に生まれる特別な島として描かれた淡路島。その背景には、古代国家形成期に重要な役割を果たした“海人”とよばれる海の民が深く関わっていました。その歴史は弥生時代の先端技術である金属器文化をもたらし、古墳時代には塩や海産物の生産に携わるとともに巧みな航海術を駆使してヤマト王権を支え、奈良時代には海人が生産する塩や海産物が献上され、天皇の食膳を司る「御食国」としての島の姿を形づくりました。この“海人”とよばれた海の民の足跡は、貴重な遺跡や出土品をはじめ、多くの万葉歌人に詠まれた美しい景勝地、そして島内各所で味わうことのできる豊かな食材にみることができます。

将来像（ビジョン）

淡路島は、古来「国生みの島」「御食国」と呼ばれ、伊弉諾神宮や松帆銅鐸、五斗長垣内遺跡、淡路人形浄瑠璃等に代表される歴史遺産やストーリーのほか、都市近郊の「島」という立地特性、さらには鳴門海峡の渦潮や成ケ島など多くの資源・魅力に恵まれている。日本遺産ストーリーの中心に位置する“海人”の調査研究を通して明らかになる「島」ならではの歴史文化や風土に魅力を感じる美しく魅力ある観光の島、誇りと愛着を持って住み続けることができる島、そして都市が抱える諸問題から解放され、安全安心で心豊かに暮らせる島として、アフターコロナ社会における誰もが訪れたい・住みたいと思うスマートシティ“スマー島”を目指す。

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■伊弉諾神宮
日本最古の神社とされており、伊弉諾尊・伊弉冉尊を御祭神とする神宮。

■洲本市立淡路文化史料館
淡路島の考古・歴史資料や美術工芸品を展示。構成文化財である慶野銅鐸等が展示されている。

■南あわじ市滝川記念美術館　玉青館
構成文化財である松帆銅鐸が展示されている。弥生時代を再現したVR体験ができる施設。

（7）情報編集・発信：事例1

ストーリーを伝えるための情報基盤整備・発信
スムーズな来訪につなげる仕組みの構築

事例サマリー

- 日本遺産認定をきっかけに企業との連携が促進。民間企業が中心となり、マンガコンテストを開催。
- ストーリーを題材とするマンガやイラスト、アニメ（R4～）を募集し、有識者にて審査を行い、賞が授与される。クリエイターへのストーリーの普及のみならず、読者へもストーリーが普及できる。
- 題材となるストーリーは毎年変わり、継続的なコンテストの運営につながっている。

情報編集・発信における取組内容

＜概要＞

- 公式ウェブサイトやSNS、雑誌、テレビ番組等様々な媒体を活用するとともに、パンフレットやポスター、チラシ等も多数製作し、淡路島日本遺産について広く情報発信を実施。
- 加えて、企業と連携し、ストーリーを題材とした漫画ワールドカップを開催するなど、コンテストを通じ、情報発信の機会を創出した。

取組の背景・経緯

＜背景＞

- 日本遺産認定を契機に、淡路島にて取組を推進していた大手人材派遣会社から本事業の企画提案を受け、事業の立ち上げに着手。
- かねてより淡路島公園アニメパークで漫画「ナルト」とコラボしたアトラクションの設置や、「ハローキティ」とコラボしたレストランの開設等に取り組むなど、アニメやマンガとは親和性があった。
- 令和4年度で第3回目を迎え、応募総数は300を超えている。

取組における工夫点

＜Point①：日本遺産認定を契機に企業との連携促進＞

- 日本遺産ストーリーの認定を契機に、企業とストーリーを活用した連携を開始。
- 大手人材派遣会社が運営事務局を務めており、コンテストを通じた日本遺産ストーリーの発信を開始。
- 日本を代表するコンテンツの一つである漫画・アニメと連携することで、国内外からの注目度を集めることに成功している。

＜Point②：日本遺産を活用した漫画コンテストの開催による発信力の拡大＞

- 日本遺産を冠したマンガコンテストを開催することにより、漫画作者はもちろんのこと、その作品を読む人にも日本遺産ストーリーを伝えることができている。
- 日本遺産ストーリーを磨き上げ、毎年コンテストテーマをアップデートすることで、継続的なコンテスト運営を実現している。

▼ マンガワールドカップにおける取組

- 名称：**全国くにうみマンガワールドカップ**
  ※本年で3回目の開催
- 概要：マンガを通じて「淡路島日本遺産」をはじめ、国内外の伝承・歴史の普及促進を目的にしたコンテスト。有識者による審査を経て、賞が授与される。大手人材派遣会社が運営事務局を担う。
- 賞：淡路島日本遺産部門総合大賞（1作品）トロフィー、賞状、賞金 50万円
- 募集コンテンツ：イラスト、漫画、アニメ
- 令和3年度応募数：355件

《令和3年度マンガワールドカップ受賞作品例》

問い合わせ先

■ 淡路島日本遺産委員会（一般社団法人淡路島観光協会内）　TEL：0799-22-0742

出典：http://kuniumi-mangaworldcup.jp/2021/

＃017・ 平成27年度認定

国境の島　壱岐・対馬・五島　～古代からの架け橋～

申請者：◎**長崎県（対馬市・壱岐市・五島市・新上五島町）**

ストーリー概要

日本本土と大陸の中間に位置することから、長崎県の島は、古代よりこれらを結ぶ海上交通の要衝であり、交易・交流の拠点でありました。特に朝鮮との関わりは深く、壱岐は弥生時代、海上交易で王都を築き、対馬は中世以降、朝鮮との貿易と外交実務を独占し、中継貿易の拠点や迎賓地として栄えました。その後、中継地の役割は希薄になりましたが、古代住居跡や城跡、庭園等は当時の興隆を物語り、焼酎や麺類等の特産品、民俗行事等にも交流の痕跡が窺えます。国境の島ならではの融和と衝突の歴史を繰り返しながらも、連綿と交流が続くこれらの島は、国と国、民と民の深い絆が感じられる稀有な地域であります。

将来像（ビジョン）

①壱岐、対馬、五島の特色ある歴史的文化的価値に加え、「融和と衝突を繰り返しながらも、連綿と続く大陸との交流と絆」という、一つのコンセプトでつながれた日本遺産のストーリーとしての新たな価値の発信
②住民の地域に対する誇り、民間主体の自発的な取組、地域プレーヤーの育成などにつながる「ふるさと教育」
③訪れた誰もが「国境の島がつむいだ2300年の悠久の歴史」を堪能できるための観光振興と、次代を担う若者や民間による国境を越えた友好交流

構成文化財概要（来訪や消費のコアとなる中心的一部抜粋）

■金田城跡（対馬市）
唐や新羅の日本進攻を防ぐ目的で築かれた朝鮮式山城跡。

■原の辻遺跡
弥生時代の環濠集落跡（海外交易拠点）で、『魏志倭人伝』に記された一支国の王都。

■三井楽(みみらくのしま)
遣唐使船の最終寄港地である、五島市三井楽町の海岸域及び海域。

（7）情報編集・発信：事例2

スムーズな来訪につなげる仕組みの構築

事例サマリー

- 効果的にストーリーを発信するための仕組みとして、メディアの招聘による記事発信を県事業として実施。
- また、県外におけるイベント等の情報発信機会を積極的に活用し、県外、国外における興味や認知の増加を図っている。

情報編集・発信における取組内容

＜概要＞

- マスコミ、旅行関係の雑誌社へのプロモーションを行い、「一個人」や「旅の手帖」など発行部数の多い月刊誌に国境の島を紹介してもらうなど、ファン層への発信を強化。
- 県外での情報発信機会を積極的に活用したり、県内の他の日本遺産のストーリーと合同でパネル展を開催するなどし、当ストーリーの認知拡大に取り組んでいる。
- 結果としてWebサイトのページビューも5万PVを突破するなど、過去最高を更新できている。
- 日本遺産の認知度が年々上昇。
  ・令和2年度36%、令和3年度40%、令和4年度46%（県政アンケート）

▼ 日本遺産の日（2/13）に合わせた他ストーリーとの合同パネル展

【概要】

- ➢ 2月13日の「日本遺産の日」にちなみ、「国境の島」をはじめ長崎県内で認定を受けている4つの日本遺産の魅力を合同で紹介するパネル展を開催。併せて、FMラジオ、テレビ、県内・県外向け広報誌などで情報発信。
- 「国境の島　壱岐・対馬・五島～古代からの架け橋～」
- 「鎮守府　横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」
- 「日本磁器のふるさと　肥前～百花繚乱のやきもの散歩～」
- 「砂糖文化を広めた長崎街道～シュガーロード～」

▼ 一支国博物館情報発信（市町の例）

- ➢ プロモーションビデオを作成し、福岡、熊本、長崎３県のテレビ、熊本市、大分市などの大型ビジョンで放映。九州全域へユーチューブ広告を実施。
- ➢ ユーチューブの視聴回数が86,000回を超えるなど、国境の島の認知度向上、誘客に貢献。

取組における工夫点

＜Point①：他メディアの効率的な巻き込み＞

- メディア合同招聘事業を行い、10社のメディアを招聘し、日本遺産事業を紹介し、記事として取り上げてもらう等の試みを実施。
- 結果として、Web媒体3社、紙媒体1社に取り上げてもらうことに成功。

【Web媒体】

- ことりっぷ
- エムスリー
- クーネルサロン

【紙媒体】

- シティ情報ふくおか

＜Point②：外部団体主催イベントへの積極的な参加による発信活動＞

- 文化庁事業や、県内イベントでのブース出展やHP掲載等による情報発信のみならず、県外イベントにも積極的に参加し、情報発信に取り組むことで、県外からの往来の活性化に貢献。

【主な情報発信の機会】

- 日本橋「長崎館」における物産展での情報発信
- 国民文化祭「紀の国わかやま文化祭2021」の文化展での情報発信
- 東京の報道機関等を対象とした九州ブロック観光情報交換会において、「国境の島」を情報発信
- 大阪市で「旅する長崎学」講座を開催
- 大手小売店と連携した「ながさきフェア」において、北関東へ情報発信
- 日韓交流おまつり2022inソウルにおいて、韓国に情報発信
- 各種イベントにおける土器パズルの実施　　など

問い合わせ先

■ 日本遺産「国境の島」推進協議会（長崎県文化振興・世界遺産課内）　TEL（095）895-2762